西ノ原地区遺跡

県営圃場整備事業南今泉地区
埋蔵文化財等調査報告書

昭和60年3月

宮崎県中部農林振興局
宮崎市教育委員会

はじめに

宮崎市も人口28万都市になろうとしており，市内における種々の開発行為は日々増大する傾向となってきております。その中で宅地造成等の開発も増大の一途をたどり，また農政サイドでは田畑の圃場整備事業も各地域で行われております。

今回は，県営圃場整備事業が南今泉地区で行われることとなり当該工区内の宮崎市大字熊野字西ノ原において遺跡の存在が確認され，宮崎市教育委員会では宮崎県中部農林振興局からの依頼を受けて，かかる遺跡の発掘調査を実施いたしました。

この報告書は西ノ原地区遺跡A区・C区における調査記録であります。西ノ原地区遺跡は縄文時代の遺物，また集石遺構，それに弥生時代終末から古墳時代にかかる竪穴住居跡や，土師器を焼成したと思われる焼成土坑を検出するなど成果の多い発掘調査となりました。

この遺跡は，宮崎学園都市の建設される台地に接する北端低丘陵に営なまれたものであり，宮崎学園都市遺跡とも総合的に対比されるものと思われます。

この発掘調査記録が、関係各位の参考となるとともに文化財保護の一助となりますならば幸いです。発刊にあたり，発掘につきまして色々と御配慮，御協力いただきました，宮崎県中部農林振興局，炎天下のもとで発掘調査に従事していただきました方々に対し深甚の謝意を表します。

昭和60年 3 月

宮崎市教育委員会

教育長 柚木崎　敏

例　　言

1. 本書は，宮崎県営圃場整備事業南今泉地区にかかわる遺跡（西ノ原地区遺跡）について行った事前調査の報告書である。
2. 発掘調査は，宮崎県中部農林振興局の委託を受けて，国庫補助・県費補助を導入し，昭和59年６月４日から同年９月８日までの期間で，宮崎市教育委員会が実施した。
3. 調査の関係者は，次のとおりである。

調査主体

宮崎市教育委員会

教　育　長	竹　下　忠　記
教育局長	吉　田　三　男
社会教育課長	緒　方　美　利
同　課長補佐	曽　我　嘉　徳
同　主査	野　間　重　孝
社会教育指導員	伊　東　　但
同	荒　武　麗　子
調　査　員	[redacted]

4. 本報告書の文責は，本文目次に記した。
5. 掲載した図面の実測，製図及び図版の作成は，伊東，荒武が分担して当たった。
6. 写真撮影は，遠景，発掘風景，遺構については野間重孝，[redacted]が行い，遺物については伊東　但が行った。
7. 土器の整理については，北九州市立考古博物館館長の小田富士雄氏の御指導をいただき，土器についてご執筆をお願いした。
8. 本書の編集は，野間重孝が主となって行った。
9. 当遺跡における出土遺物は，宮崎市教育委員会において保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　西ノ原地区遺跡の立地と環境……＜伊東　但＞…… 1

Ⅱ　調査の経過と概要……＜荒武麗子＞…… 1

Ⅲ　西ノ原遺跡Ａ地区

1. 焼成土坑……＜伊東　但＞…… 8

遺　構……＜　〃　＞…… 8

出土遺物……＜　〃　＞…… 8

2. 1号住居跡・土坑……＜荒武麗子＞…… 12

遺　構……＜　〃　＞…… 12

出土遺物……＜　〃　＞…… 13

3. 溝状遺構……＜荒武麗子＞…… 15

4. 2号住居跡……＜　〃　＞…… 15

遺　構……＜　〃　＞…… 15

出土遺物……＜　〃　＞…… 15

5. 集石遺構……＜伊東　但＞…… 18

6. 土師器……＜　〃　＞…… 20

7. 須恵器……＜　〃　＞…… 21

8. 土錘・鉄鏃……＜　〃　＞…… 22

9. 布痕土器……＜荒武麗子＞…… 22

Ⅳ　西ノ原遺跡Ｃ地区

1. 縄文土器……＜荒武麗子＞…… 26

2. 石　器……＜　〃　＞…… 31

3. 土師器……＜伊東　但＞…… 32

4. 布痕土器……＜荒武麗子＞…… 34

5. 須恵器……＜伊東　但＞…… 36

6. 58年度予備調査出土土器……＜荒武麗子＞…… 37

Ⅴ　西ノ原遺跡の土器とその位置……＜小田富士雄＞…… 40

挿　図　目　次

第１図　西ノ原地区遺跡位置図…… 2
第２図　西ノ原地区遺跡全体図…… 4
第３図　Ａ地区全体図…… 6
第４図　Ａ地区土層断面図…… 7
第５図　焼成土坑実測図…… 9
第６図　焼成土坑出土遺物実測図…… 11
第７図　１号住居跡実測図…… 13
第８図　１号住居跡出土遺物実測図…… 14
第９図　２号住居跡実測図…… 15
第10図　２号住居跡出土遺物実測図…… 16
第11図　２号住居跡出土石鏃…… 18
第12図　集石遺構実測図…… 19
第13図　Ａ地区出土土師器実測図…… 20
第14図　Ａ地区出土須恵器実測図…… 21
第15図　土錘・鉄鏃実測図…… 22
第16図　Ａ地区布痕土器実測図…… 23
第17図　Ｃ地区全体図及びグリッド図…… 24
第18図　Ｃ地区土層断面図…… 25
第19図　Ｃ地区出土縄文土器実測図…… 26
第20図　Ｃ地区出土石器実測図…… 31
第21図　Ｃ地区出土土師器実測図…… 33
第22図　Ｃ地区出土布痕土器実測図…… 35
第23図　Ｃ地区出土須恵器実測図…… 36
第24図　58年度予備調査出土遺物実測図（Ｃ地区）…… 37

第１表　西ノ原地区遺跡出土布痕土器一覧表…… 39

図　版　目　次

図版１　西ノ原遺跡Ｃ地区全景・西ノ原遺跡Ａ地区全景…… 42
図版２　Ａ地区１号住居跡・Ａ地区２号住居跡…… 43
図版３　Ａ地区焼成土坑・Ａ地区集石遺構…… 44
図版４　Ａ地区土器出土状態・Ａ地区１号住居跡内土器出土状態…… 45
図版５　Ａ地区２号住居跡内土器出土状態・Ａ地区集石検出作業風景…… 46
図版６　Ａ地区焼成土坑内出土遺物…… 47
図版７　Ａ地区焼成土坑内出土遺物…… 48
図版８　Ａ地区１号住居跡内出土土器…… 49
図版９　Ａ地区２号住居跡内出土土器…… 50
図版10　Ａ地区出土土師器…… 51
図版11　Ｃ地区出土土師器…… 52
図版12　Ａ地区出土遺物・２号住居跡出土石鏃・Ｃ地区出土石器…… 53
図版13　Ａ地区出土布痕土器…… 54
図版14　Ｃ地区出土布痕土器…… 55
図版15　Ｃ地区出土布痕土器…… 56
図版16　Ｃ地区出土縄文土器…… 57
図版17　Ｃ地区出土縄文土器…… 58
図版18　Ｃ地区出土須恵器…… 59
図版19　Ｃ地区出土須恵器…… 60
図版20　Ａ地区出土須恵器・58年度予備調査出土遺物…… 61

Ⅰ　遺跡の立地と環境

西ノ原遺跡は，宮崎市大字熊野字西ノ原に所在する。ここは，日南山地，家一郷山地より発する加江田川と，鰐塚山より発する清武川にはさまれ，日向灘近くに形成された清武，木花段丘の北側の段丘下位に位置し，比高差約１ｍ～２ｍ下の底地面は，水田地帯を形成している。

清武，木花段丘上は，近年，宮崎学園都市の建設が進み，これに伴い，県文化課により，宮崎学園都市遺跡群として，旧石器時代から近世にかかる，20ケ所近くの遺跡が確認，調査されており，西ノ原遺跡は，これら宮崎学園都市遺跡群のほとんどが形成されている本丘陵と，その北に谷を挟んで独立する北丘陵間の谷底付近に位置している。

宮崎学園都市遺跡群の内，西ノ原遺跡に近接し，また同じ様な立地条件を持つ遺跡として，西ノ原遺跡の西の谷部に所在する，入料遺跡，浦田遺跡，赤坂遺跡を掲げる事が出来る。入料遺跡は，貝殻文土器，押型文土器，集石遺構等，縄文時代の遺跡であるが，浦田遺跡，赤坂遺跡は旧石器から近世までと幅があり，西ノ原遺跡との関連性がうかがえる遺跡である。

Ⅱ　発掘調査の経過と概要

西ノ原遺跡発掘調査は，県営圃場整備事業に伴う調査で，当初，宮崎県中部農林振興局の委託を受けて，宮崎県文化課が確認調査を行いその結果を受けて宮崎市教育委員会が，西ノ原地区のＡ区およびＣ区の発掘調査を行ったものである。

1. 確認調査

昭和58年９月８日～９月14日

調査主体　　宮崎県教育委員会

調査担当者　　文化課主任主事　永友良典

作業員　　５名

この調査は，舌状の台地にひろがる畑地（Ａ，Ｂ，Ｃ区）を重点とし，各区に基準トレンチを一本入れて，確認調査が進められた。その結果，Ａ区については，平安期を中心した遺物が確認され，Ｃ区では，縄文～平安期の遺物が認められ，遺構としても平安期と思われる溝，柱穴等が検出された。Ｂ区については遺構・遺物の存在が確認されず，対象から除外することとなった。

2. 昭和58年度予備調査

昭和58年12月12～12月28日

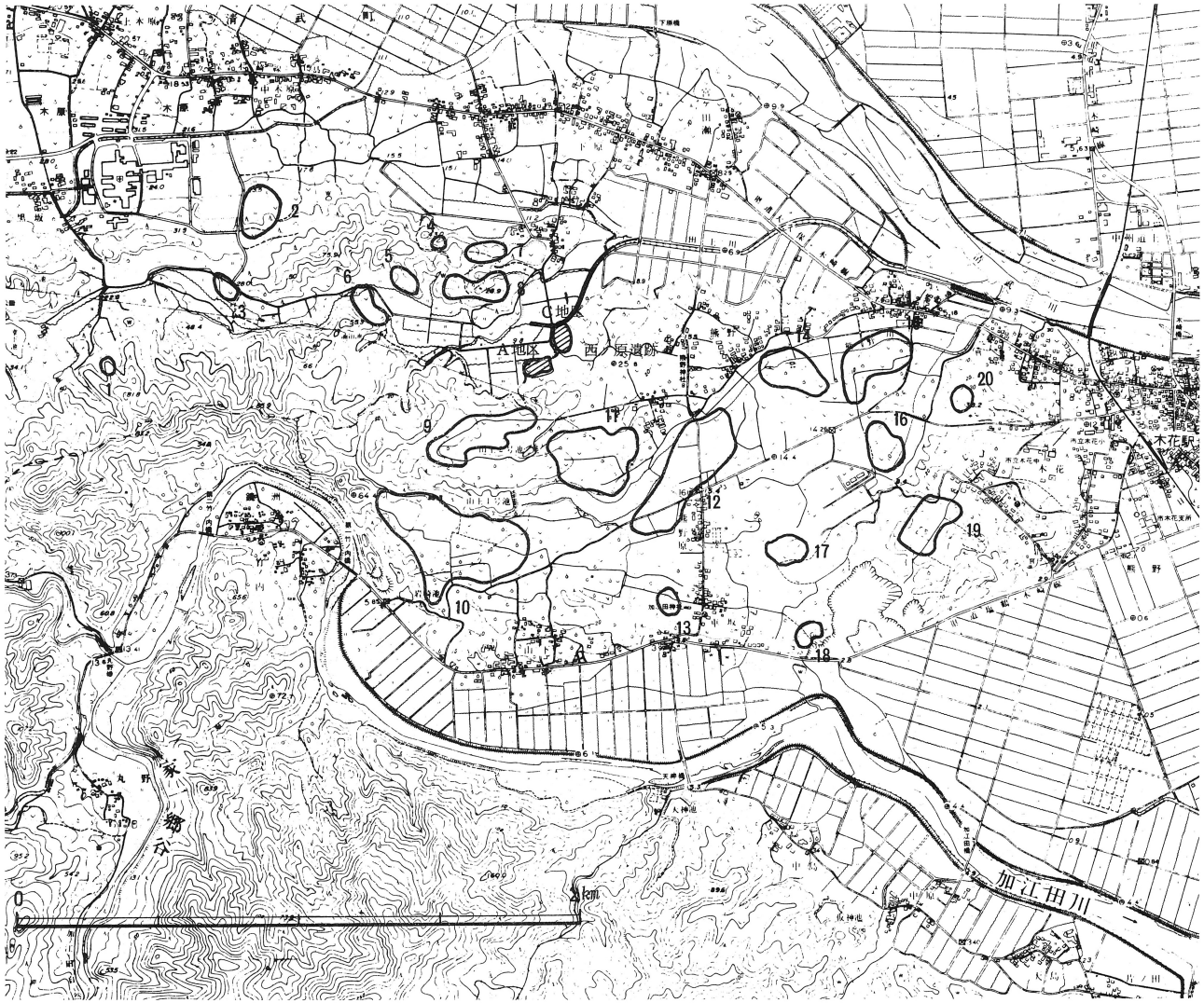
調査主体　　宮崎市教育委員会

調査担当者　　社会教育課社会教育主事　野間重孝

調査員　　社会教育指導員　　荒武麗子

作業員　　11名

先の確認調査を受け，昭和58年度分の工事にかかるＣ区の道路拡張予定区域内1,000㎡についての調査を，宮崎市教育委員会が行うこととなった。調査は道路予定測量杭を中心に，東側



1. 山内石塔群
2. 下田畑遺跡
3. 赤坂遺跡
4. 小山尻西石塔群
5. 浦田遺跡
6. 入料遺跡
7. 小山尻東遺跡
8. 田上遺跡
9. 堂地西遺跡
10. 平畑遺跡
11. 堂地東遺跡
12. 熊野原遺跡
13. 犬の馬場遺跡
14. 前原西遺跡
15. 前原北遺跡
16. 前原南遺跡
17. 陣ノ内遺跡
18. 車坂城跡
19. 木花遺跡
20. 今江城跡

第1図　西ノ原遺跡位置図

に４×４mのグリッドを設定して行った。結果は，県文化課が確認調査の際，指摘していた溝状遺構を検出し，床面に貼りついた状態で土師器壷底部が一括して出土している。しかし，耕作による上面のカットが進んでおり，また，工事によって重機でカットされており，遺物の量も少なく，全体的にプライマリーなあり方としてはとらえられない状況であった。

3. 本調査

昭和59年６月４日～９月８日

調査主体　宮崎市教育委員会

調査担当者　社会教育課主査　野間重孝

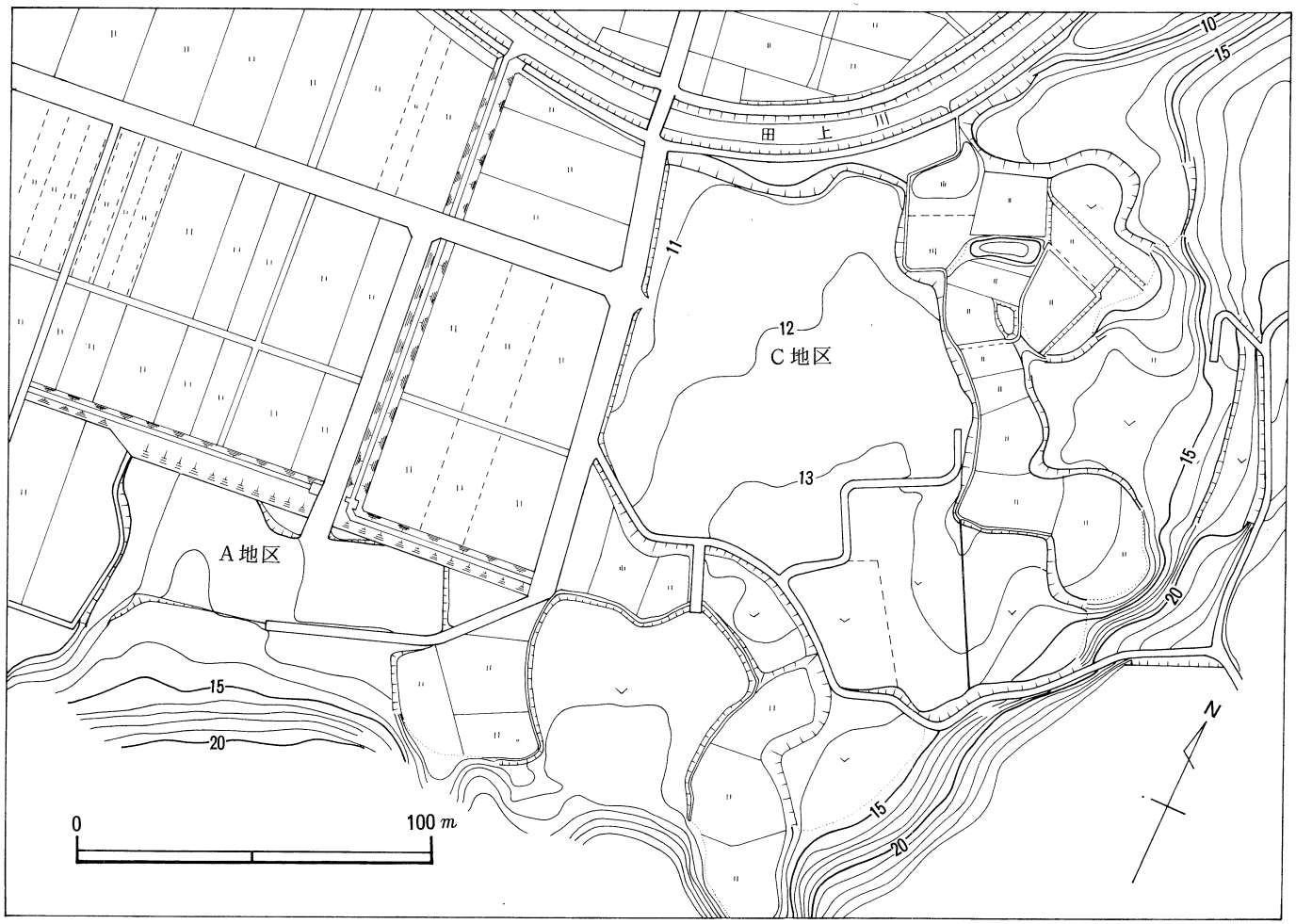
調査員　社会教育指導員　伊東但

調査員　社会教育指導員　荒武麗子

調査補助員　[redacted]

作業員　30名

６月５日に現地に機材等の搬入，テント設営を行い，翌６日からＣ区についての表土剥ぎを開始したが，未だ作物が植えつけてあって手のつけられない区域が残されており，それが８月に入るまでそのままのところもあったため，表土剥ぎに時間をとられた。Ｃ区では８月いっぱい発掘調査を行ったが，まず表土を剥いだ段階で，黄色オレンジ層が現われたが，Ｃ区の中央部を境にして，東側では明るい黄色オレンジ色土で，西側では赤味のつよいオレンジ色土となっていた。また，Ｃ地区の東側では，黒色土が１m～１m50の巾で南北方向に，溝状にのびているのが検出されたが，一部を掘り下げてみるとU字状を呈し，溝の中心部の最も深いところで，東側にみられる明るい黄色オレンジ色土が，西側の赤味を帯びたオレンジ色土に入りこんで二つに分かれているのが表面では観察された。埋積土は黒色砂質土でやわらかくぼこぼこしている。昭和58年度に，同じ地区の西側の道路工事の事前調査の際，確認された溝状遺構と規模，方向等類似しているが，同時代のものかどうか遺物も全く出土せず判断できなかった。Ｃ地区では，これ以外に数条，性格の判断しがたい溝状遺構や，赤ホヤ上に褐色粘質土を巾20～30cm巾で，厚さ10cmばかりにかたく叩きしめて，道状に南北に台地の上を斜めに続く遺構が検出された。これは，土層断面の観察の結果，明るいオレンジ砂質層に上から30～40cmの巾で掘り込まれたU字状の溝の底部と判断されたが，遺構の時期，性格等についてはわからなかった。この地区では，縄文～平安時代の遺物が散在しており，西側端に縄文時代の土器が集中すること，中央部より西側に布痕土器が多くみられること以外に，これといった遺構の存在を示すような，まとまりをもった遺物の出土状況は確認されなかった。そこで，８月後半からは，一部表土剥ぎを行っていたＡ区に集中することとなった。この地区の西側の標高の最も高い地点で，不整形の土坑様のプランが検出され，溝状遺構がそれをめぐる形で検出された。Ａ区東側では，上面がカットされており，遺物は全く出土しなかったため，発掘調査の対象は主に西側の標高の高い地域に限って行われたが，ここでは先述の不整形土坑に隣接して住居跡が検出され，北東端に近接したところでも住居跡，集石遺構がみつかった。不整形遺構は，最終的に土師器を焼いた焼成土坑であることがわかった。発掘調査期間全体を通じて，快晴にめぐまれ，ほとんど

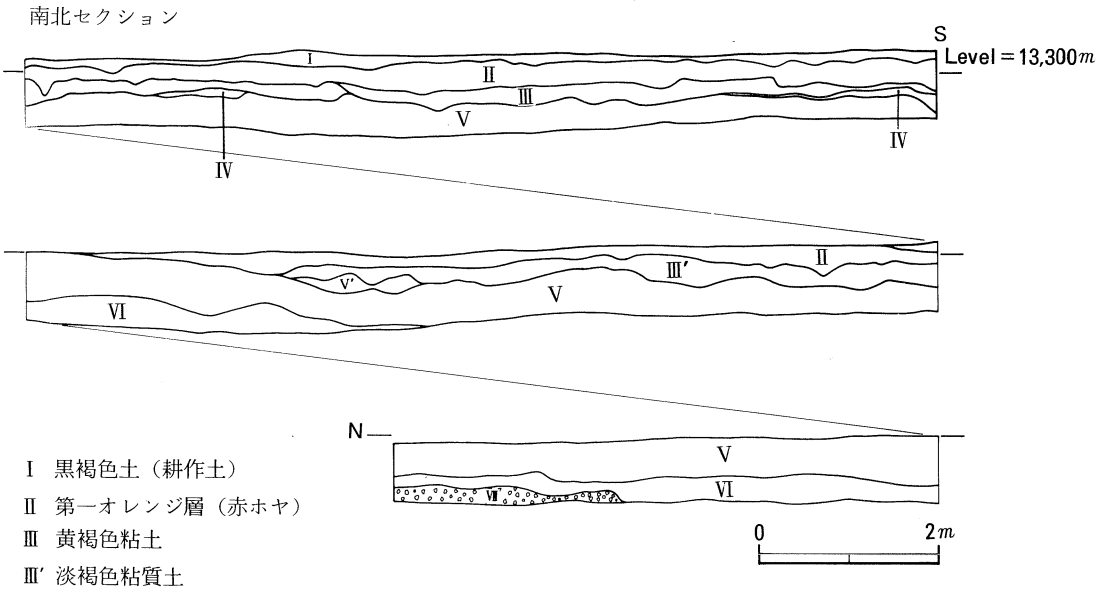


第2図　西ノ原遺跡全体図

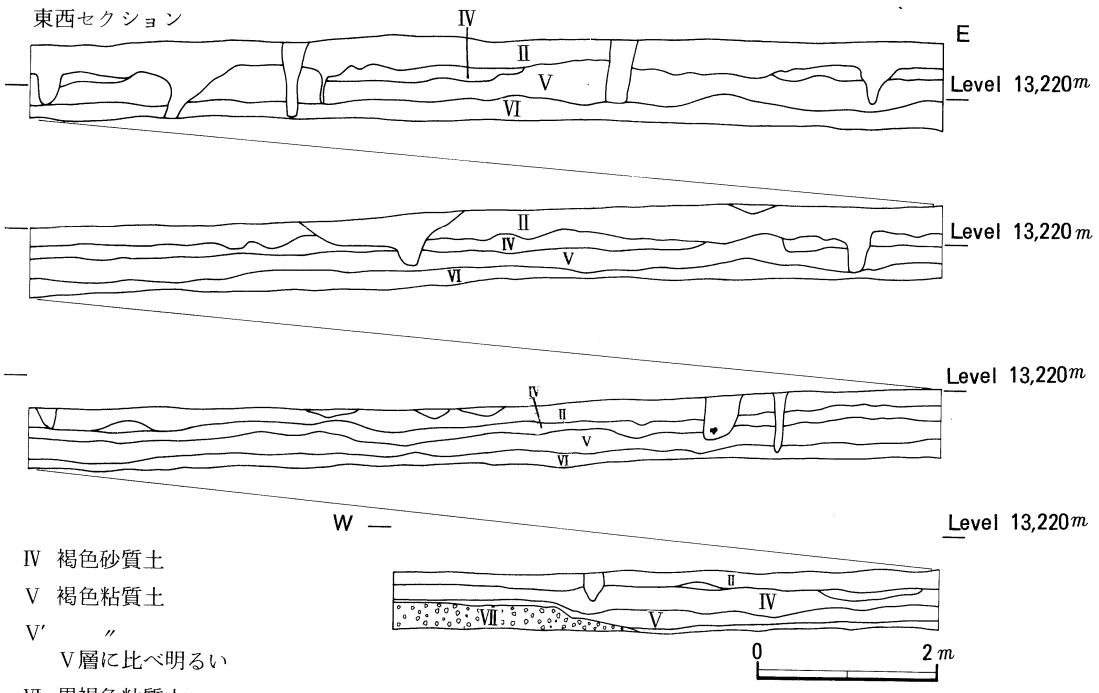
雨は降らなかったのであるが，反面，土壌の乾燥がすすみ，遺構の確認には困難がともない，その保全にも苦慮した。

III　西ノ原遺跡・A地区

第3図　A 地 区 全 体 図



I　黒褐色土（耕作土）
II　第一オレンジ層（赤ホヤ）
III　黄褐色粘土
III′ 淡褐色粘質土



IV　褐色砂質土
V　褐色粘質土
V′　〃
　V層に比べ明るい
VI　黒褐色粘質土
VII　礫　層

第4図　A 地 区 土 層 断 面 図

1. 焼成土坑

遺　構（第5図・図版3）

A地区の西，1号住居跡の東側に近接して検出されたもので，約20cmの浅い掘り込みをもつ径約2.5mの円形プランを呈し，その埋積土中に多量の土師器片を含むものである。埋積土は焼土及び炭化物を含んでおり，東側の1部に比較的多量の炭化物の集中が見られた。

出土遺物（第6図，図版6・7）

坏

1は推定口径14.4cm，底径5.5cm，器高5cmを計る。内面及び外面の体部に強いロクロ成形痕を残し，底部にはヘラ切り痕が残る。内外面共に黄褐色を呈し，焼成は良好である。

2は推定口径15cm，器高5.5cmを計り，内外面に弱いロクロ成形痕を残す。底部の残存が少なく，切り離し技法は明確にとらえ得ないが，ヘラ切りの可能性の高いものである。内外面共に黄褐色を呈し，焼成は良好である。

3は推定口径15.2cm，同底径6.5cm，器高5cmを計り，内外面共に弱いロクロ成形痕を残す。色調は明黄褐色，焼成は良好である。

4は推定口径14cmを計るが，底部を欠損している。比較的器高の高いもので，内外面に強くロクロ成形痕を残し，色調は内外面共に黄褐色を呈する。焼成については良好と言うべきであろうか，指ではじくと須恵式土器の様な音がする。残存する外面のほとんどに薄く，灰かぶりによるものと思われる自然釉の付着が見られる。

5は推定口径13.8cmを計り，体部外面下半部のみ強いロクロ成形痕を残す。口縁部はやや外反し，残存する内面及び外面の1部は黄褐色，外面のほとんどは，カーボンにより黒色を呈す。焼成は良好である。

6は底径6cmを計り，内外面にロクロ成形痕を残す。底部はヘラ切り，内外面共に基本的な色調は黄褐色，内面の体部表面のみ青灰色を呈す。

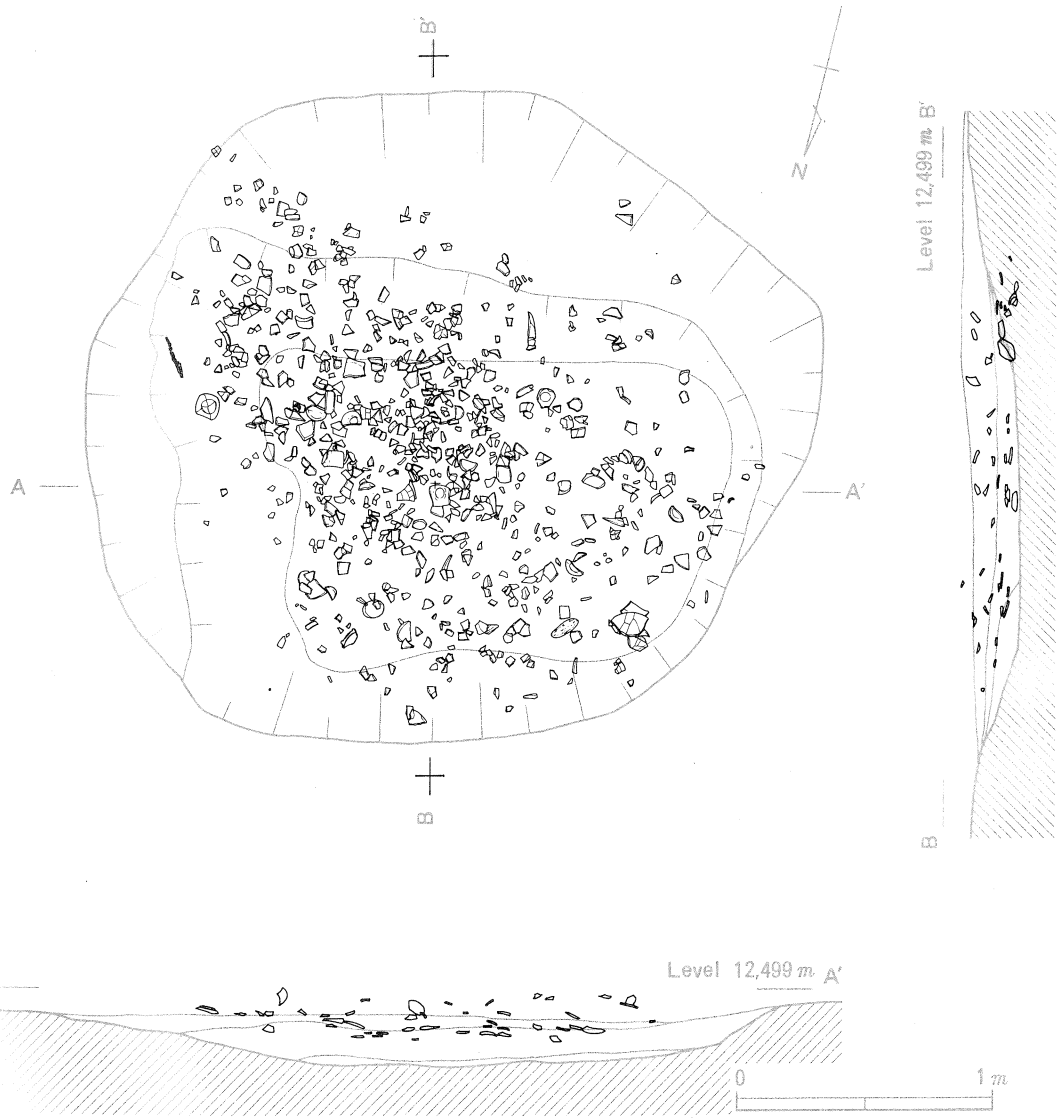
7は底径5.7cmを計。底部には，ヘラ切り痕及びワラ状の圧痕が残り，体部下位において，底部をまわる様にヘラケズリがなされている。外面黄褐色，内面及び，外面の一部が黒色を呈する。

8は底径6cmを計る。底部にヘラ切り痕を残し，体部下位において，底部を回るようにヘラケズリがなされている。内外面共に黄褐色を呈する。

9は底部のみの残存で，内面は剥離している。底径は5.5cm，明黄褐色を呈し，焼成は不良，底部にヘラ切り痕を残す。

10も底部のみの残存で，内面も剥離している。焼成は不良で，摩耗している為，明瞭ではないが，ヘラ切り痕を残すものである。色調が黄褐色を呈し，底部側面が外に開く特徴をもつ。

11は底径6.8cmを計る。底部にヘラ切り痕を残すが，ナデ調整を受けている。他の出土土器すべてが一様に微砂粒を含むのに比べて，本資料のみ，1mm～3mmほどの小石が混入して



第5図　焼成土坑実測図

いる。焼成は良好で，内外面共に明黄褐色を呈する。底部側面が下方にしたがって開く特徴をもつ。

12は底径6.9㎝を計る。底部にヘラ切り痕を残し，裾部が開く断面形を呈する。焼成は良好，残存する体部下位の外面において回転横ナデがなされている。内面は剥離して残存せず色調は黄褐色、

高台付椀

13は推定底径8㎝を計り，底部高台内に放射状の指頭調整痕を残すが，焼成不良の為，磨耗して，細部の調整は不明である。内外面共に明黄褐色を呈する。

14は推定底径7.9㎝，高台内面に放射状の指頭調整痕を残し，その周囲は高台より連続する回転ナデ調整が施されている。焼成は良好。本資料は2片の接合によるものであるが，それぞれ色調が異なり，1片は内外面共に明黄褐色，1片は青灰褐色を呈する。

15は底部のみの残存である。2つに割れた状態で出土したが，片方の焼きひずみによって接合は不可能になっている。一次焼成時に割れたものと思われる。焼成は高温で行なわれた様で，指ではじくと須恵式土器の様な音色がする。高台内面に放射状の指頭調整痕が残り，高台内外面共に回転ナデ調整かなされている。色調は内外面共に黄褐色を呈し，一部に灰かぶりによる自然釉の付着が見られる。

その他

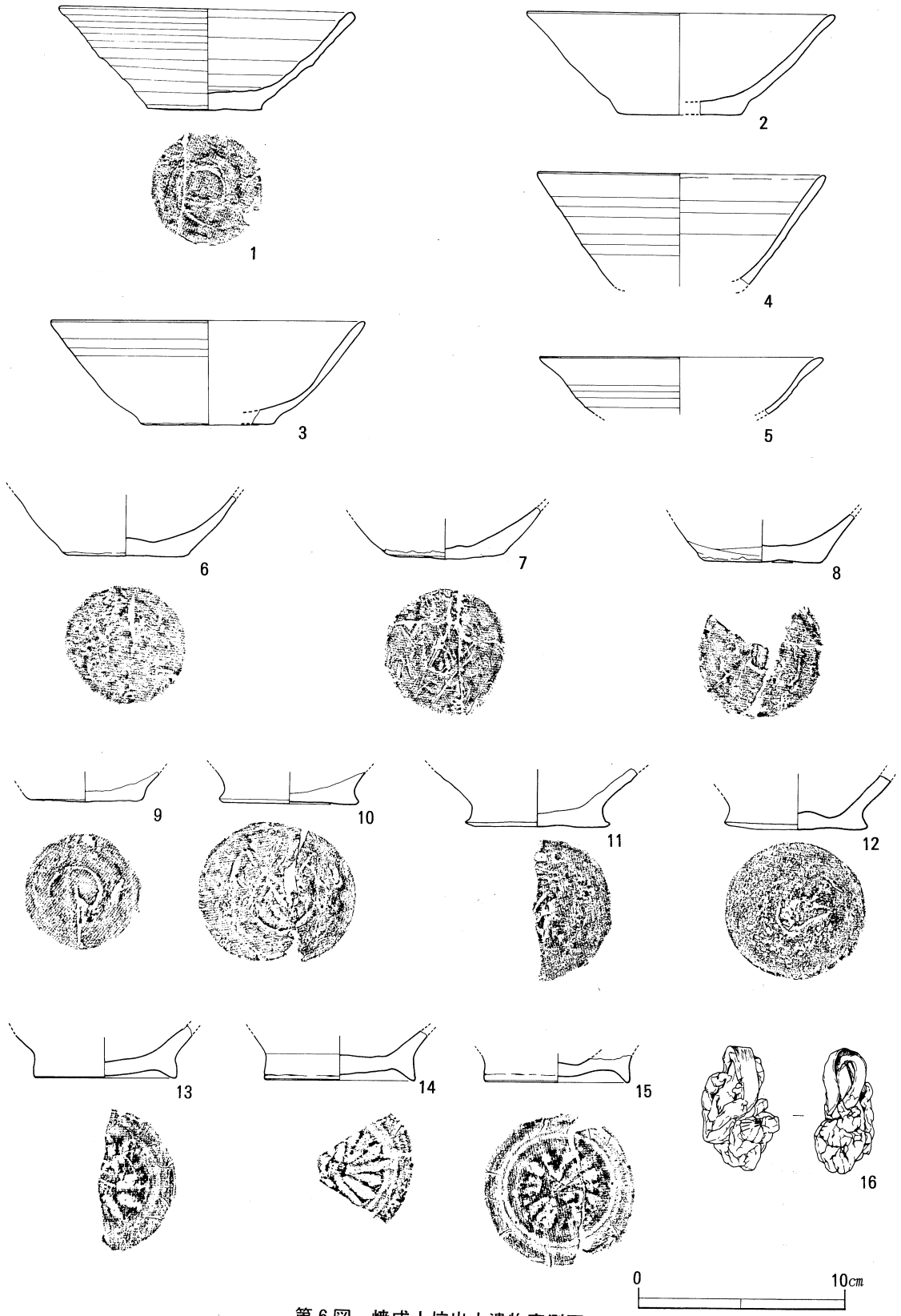
16は本土坑中より出土した粘土塊の1つである。ベルト状の粘土ひもをまるめたもので，ロクロ成形時の回転ヘラケズリ等の削りクズをまるめて投げ込んだものと思われる。所々に指頭痕やロクロ調整の痕跡が見られるものである。

小　結

まず，本遺構の性格であるが，15・16等の1次焼成時に帰因する特徴を持つ遺物から，土師式土器の焼成土坑として，とらえ得るものと思われる。本遺構において，明確にとらえ得る焼成品の器種は坏と高台付椀のみである。

坏における特徴は，比較的小径の底部に，直線的に開く体部で明瞭にロクロ成形痕を残す1類（1・2・3・4・5）。底部からの立ち上りが丸みをおび，体部が最終的にナデ調整されている2類（6・7・8・9）。底部が外にはり出す，3類（10・11・12）に大別され，確認出来る底部は，すべて「ヘラ切り」による切り離しが行なわれている。またその痕跡から，すべて時計廻りのロクロ回転であった事がうかがえる。底部中心より外周まで，一条の沈線の残る資料が見られる（7・8・9・13）が，おそらく，ヘラによる切断終了後，坏をはずす為に，ヘラをこじった痕跡ではないかと思われる。

高台付椀における特徴は，高台内部における放射状の指頭調整痕である。本遺構中出土した，高台付椀すべてに見られる特徴で，高台を設ける段階での調整痕と思われるが，その技法を明



第6図　焼成土坑出土遺物実測図

確にとらえ得る資料は含まれていない。また本遺跡において，この特徴を高台付埦は，本遺構以外からは出土していない。

今回，粘土塊（16）の出土により，近辺に工房跡の存在を強く感じた訳であるが，1・2号住居跡は共に時期を大きく異なったものであり，可能性をもつものは確認出来なかった。

2. 1号住居跡

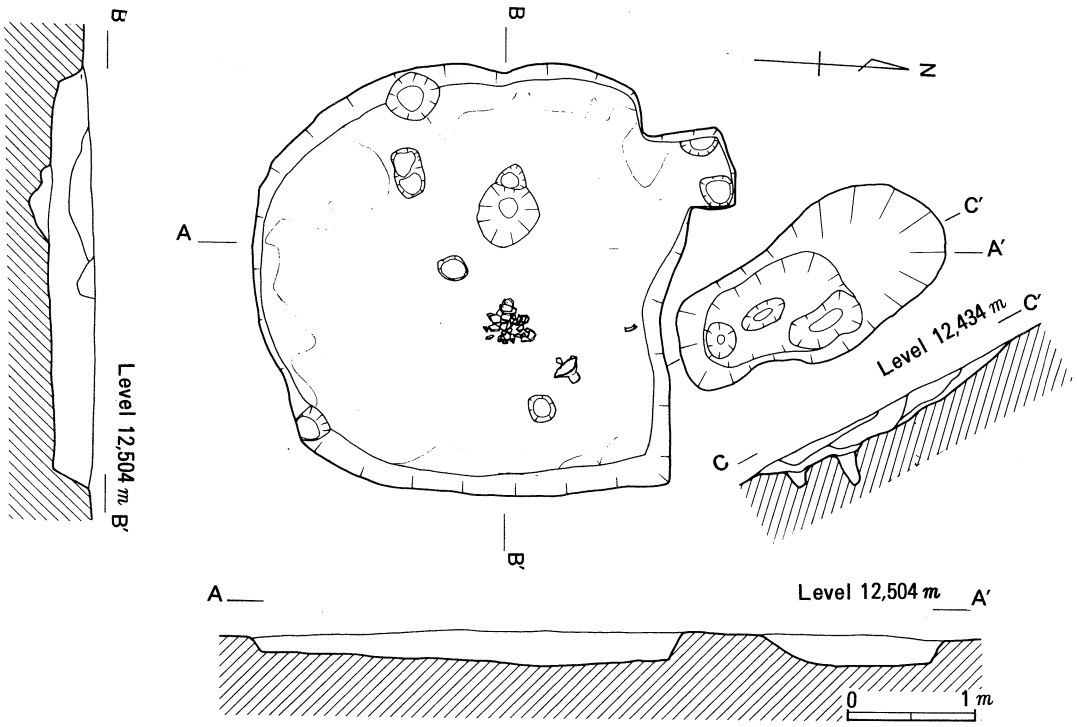
遺　構（第7図，図版2）

1号住居跡は，A地区の西端部に営まれ，この地区で最も標高の高い地点に位置している。ほぼ東西南北に方位し，東辺長2.9 *m*，北辺長3.1 *m*，西辺長2.5 *m*+0.6 *m*，南辺長2.55 *m*を計る。主軸方位は，N－4°－Wである。不整形の方形隅丸状を成す。床面は堅くしまっており，平担である。赤ホヤに掘り込まれているため，乾燥がすすむと平面プランの検出が困難となり，特に東辺と南辺での確認がむずかしかった。壁ぎわを掘りすすめていくと黄褐色粘質土が露出しはじめ，壁の立ち上がりの検出に有効となった。これは土層図のⅢ～Ⅲ′層にあたり，硬くブロック状を呈しており表面がでこぼこしている。おそらくⅢ～Ⅲ′層が比較的浅いところまで上ってきており，それを含めて掘り込んでいるため，床面と同レベルで露出してくるものと思われる。ピットは全部で7個検出できたが，柱穴として想定できるのは，中心にあるものと，東側壁ぎわの2個，西側壁ぎわの1個である。中央部西寄りに楕円形の小さい掘り込みがみられたが，炭化物，焼土などは検出されなかった。この掘り込みの東側に，接合するとほぼ完形に近くなる甕が出土し，その北東に近接してほぼ完形の高坏が，北壁に接して高坏脚部が出土した。また，1号住居跡に北接して楕円形の土坑が検出された。なだらかな掘り込みで南東寄りに3個の深いピットがみられる。遺物はピットから土師器の小破片が出土しているのみである。1号住居跡に関係した遺構かどうかは不明である。

出土遺物（第8図，図版8）

1は平底で，胴部下位にやや張りがあり，そのまま長胴気味に口縁近くまでのび，口縁のすぐ下あたりで少し内傾してくびれを成し，そこからゆるやかに外へ向かって屈曲して口縁部となり，さらに口縁直下で外反して細く丸味を帯びた口唇部となる。外面上位から中位にかけては，タテ方向に粗いハケ目が施され，底部付近ではケズリに近くなっている。内面は，口縁部と胴部中位が粗いヨコ方向のハケ目で，口縁部と胴部の境目の屈曲部の下には斜め方向の粗いハケ目が施されている。また胴部下位から底にかけては，ヨコ方向のハケ目が施されているが，それ以前の指ナデの痕跡がよく残っている。胎土に粗砂・細砂が多く含まれており，焼成は良い。色調は淡黄褐色で，やや赤味がかかった部分がある。外面にはススが帯状に付着している。推定口径27.3 cm，底径5.8 cm，器高約30.4 cmを計る。

2は推定口径6.3 cm，器高3.5 cmを計る。器表面には右まわりの回転ナデが施されている。底部は，若干上げ底気味で内側が少しふくらみをもっており，体部の立ち上がりとの境目に指押えの痕跡がみられる。ヘラ切りによる底部切り離しである。口縁は外反し，端部が



第7図　1号住居跡実測図

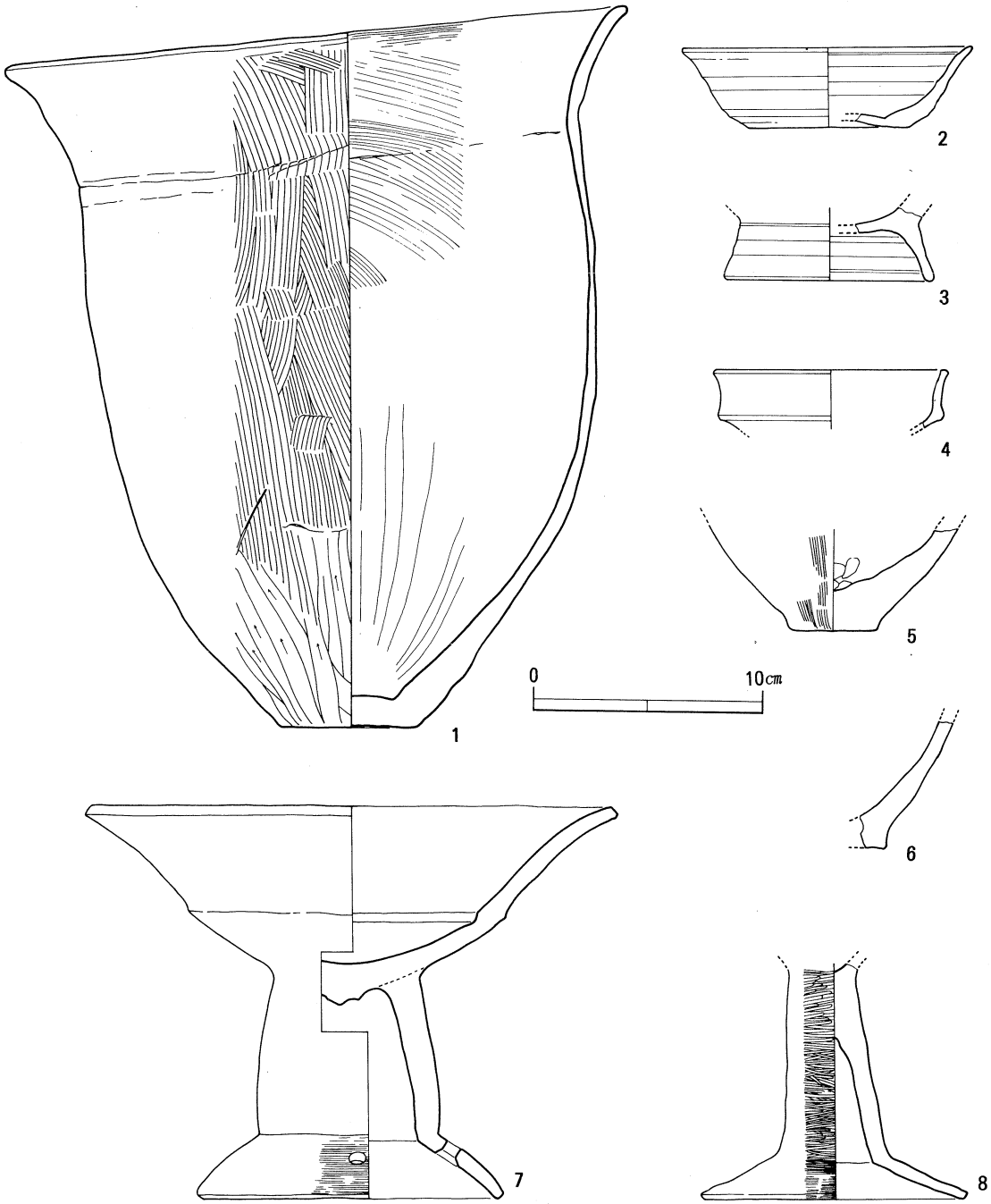
丸みをおびている。胎土は精選されており，細かい砂粒が含まれている。焼成は良く，色調は明るい黄褐色を呈する。

4はきわめて小さい破片で，二重口縁の小型壷になるものと思われる。推定口径は10.2cmを測る。胎土は精良で，細かい灰色の砂粒を含む。色調は淡褐色であり，焼成は良好である。

3は，高台の破片である。底径は推定9.2 cmを測り，胎土は精良で，赤褐色の砂粒を少し含む。色調は明るい黄褐色をしており，焼成は良好である。内外面共に回転ナデの痕がついている。方向は不明である。5は壷の底部で，平底をなす。胎土には灰～黒色の細かい砂粒を含み，焼成は良く，色調は，外面が淡黄褐色で内面が灰褐色を呈する。外面にうすくタテ方向にハケ目が残っている。内面は指ナデである。底径は推定で3.8 cmを計る。

6も底部である。底はわずかしか残っていない。底から1.0～1.5 cmまっすぐに立ち上って，そこから外に張り出してふくらみをもつ胴部へとつながる。床につく部分は，粘土を貼りつけて外へのはりだしをもたせ，若干上げ底にしている。外面は指ナデ→ハケ目調整，内面はナデであり，細かいハケ目が少しみられる。胎土には茶褐色～黒色の細砂粒，粗砂粒を含み，焼成は良い。色調は外面が黄褐色，内面が灰褐色～黄褐色を呈する。

7と8は高坏である。7は脚部を$\frac{1}{2}$弱と坏部の口縁を若干欠失するのみで，ほぼ完形に近いものである。脚柱は非常に太く，中位よりやや下が膨み，最大径7.9㎝となるエンタシス状をなす。脚裾部は，脚柱から球形に膨みながらはりだし，短く内湾して裾端部へとつながっている。脚には焼成前の穿孔が2個残っており，もう一個痕跡がみられる。全部で4個穿たれていたも



第8図　1号住跡出土遺物実測図

のと思われる。坏部は深く，脚柱からの立ち上がりは，やや内傾して膨みをもちながら肩部の屈折部へとおさまり，肩部で段をもち，そこから外反してのび口縁部となる。口縁部は端部に近づいてから若干つよく外反し，最後に少し内湾させている。調整はナデ，あるいはヨコナデである。全体にずんぐりした高坏である。胎土は精良で粗い赤褐色粒子と黒灰色の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好である。色調は淡黄褐色を呈する。口径23.2㎝，脚裾径13.3㎝，器高17.2㎝を計る。8は坏部を欠損し　脚部も$\frac{1}{2}$ほど欠失している。胎土に粗い灰色～白色の砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を呈する。脚柱部にはタテ方向に細かいハケ目が施され，その上からヨコ方向にていねいにミガキをかけている。脚部も同様にヨコにていねいにナデまたはミガキがかけられている。内面は少し，しぼり痕がみられ，ヨコ方向のケズリ痕がみられる。脚内側はナデである。脚裾径は推定で11.5㎝を計る。

3. 溝状遺構（第3図）

A地区の南西端の標高が最も高い地点に，1号住居跡や焼成土坑を囲んで，L字に溝状遺構がめぐっていた。深さ10～20㎝前後と浅く，長さは東西に約18m，南北に約12.5m，を計る。両端部共に発掘区域外へのびている。耕作による撹乱を受けており，遺物は出土しなかった。

4. 2号住居跡

遺　構（第9図，図版2）

2号住居跡は，A地区の北西端にある。表土を剥いだ後，オレンジ層中にほぼ同系色の方形プランが見えはじめたので，中央にベルトを残して掘りはじめたが，埋土は硬いブロック状の黄褐色粘質土であった。発掘調査中は雨が少なかったので，乾燥が進み，輪郭が不明瞭になってしまい，プランの確認，壁の立ち上がりの検出は非常に困難であった。東辺長3.8m，北辺長3.0m，西辺長3.4m，南辺長3.8mを計り，主軸方位はN－35°－Wである。南北に長い長方形プランで，中央に楕円形の掘り込みがある。柱穴は5個検出され，南辺に2個，掘り込みの西側に1個，北辺に2個である。床面は堅くしまっており，灰褐色を呈する。中央に楕円形の掘り込みがあり，カーボンを含んだ黒褐色土がつまっていた。遺物としては，ミニチュア土器，甕，石鏃などがある。

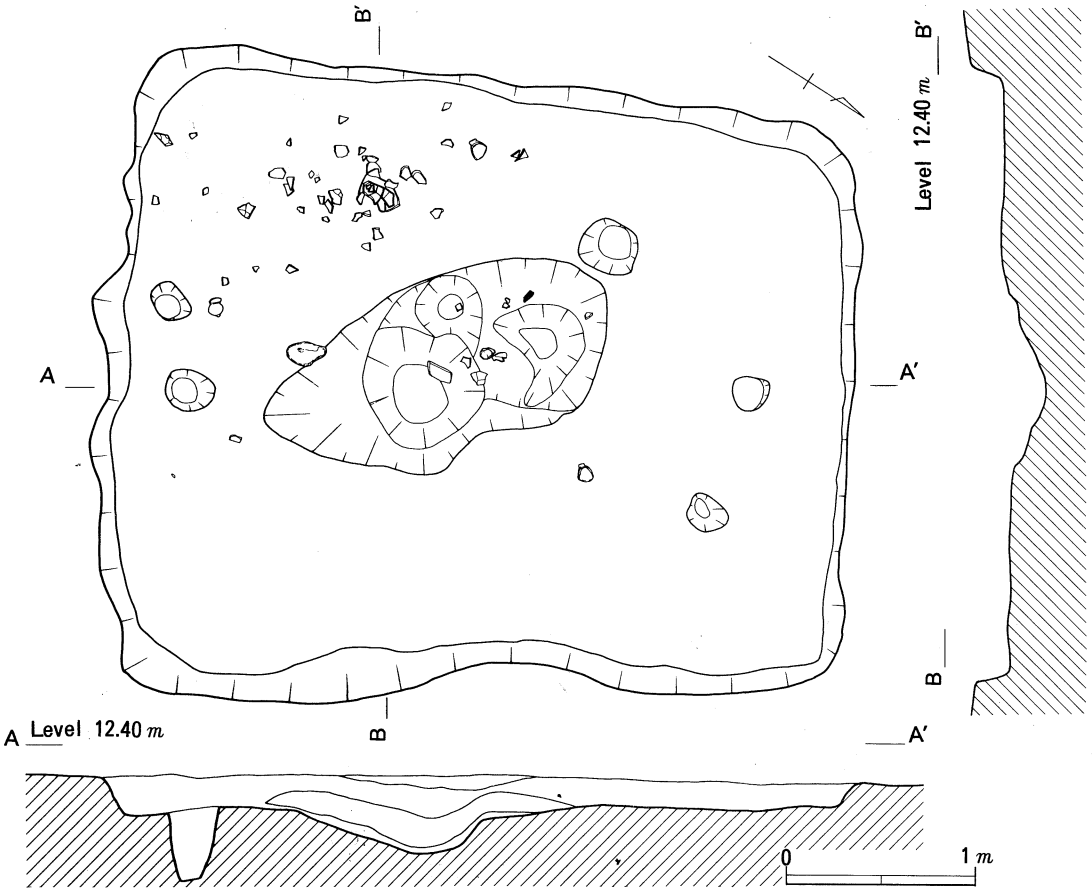
出土遺物（第10図，図版9）

1は，鉢形土器で，底部は粘土をはりつけ，まわりを削り，丸底を少し強調したようになっている。底部から胴部にかけては，球形に立ち上がり，胴中位よりやや上に胴部最大径がきている。21.5㎝を計る。そこから少し内傾して頸部にいたり，そこで外反して短くのび口縁部になる。外面は指ナデの後，ハケ状の工具でナデており，頸部から口縁にかけては，内外共に指でつまんだ痕がよく残っている。底部付近では，ハケナデがややケズリに似た状態を示している。丸底にふくらんだところは，ハケナデが施されている。内面はタテ方向のハケナデが施されており，底に近い部分では，放射状にヘラナデもしくはケズリ状になっている。口縁内側は，

指押え痕のうえから，ヨコ方向に細かいハケ目がついている。口縁端部および胴部に，帯状にススが付着している。内側の中位～底部にかけて，巾10～15cmに，ほぼ円形に淡灰色に変色している。

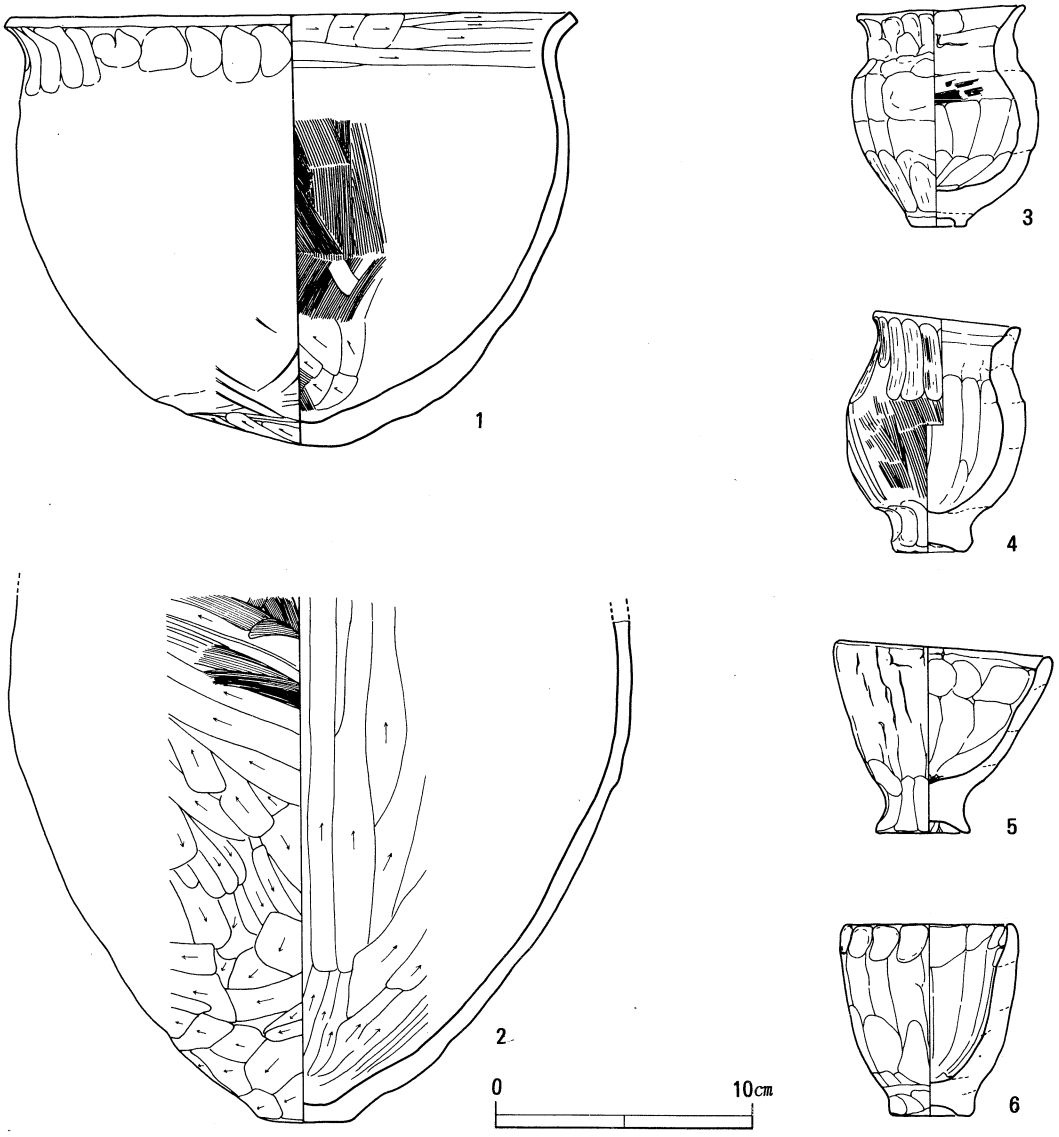
胎土は精良で粗砂，細砂を多く含み，焼成は良く，色調は黄褐色を呈す。推定口径22.4cm，器高16.9cmを測る。

2は，甕の胴部から底部にかけての破片で，底部は完存しているが，他は½強欠損している。平底になる底部は，直径3.6cmと小さく，やや丸味を帯びている。外面には巾1～1.5 cmのヘラ状の工具を用いて，胴部では，タテ斜方向に，底部付近では横方向にナデており，上位ではハケナデを施している。内面は底に爪形の圧痕が残っている。（ヘラ小口痕か？）巾1～1.5 cmのヘラ状の工具を用いて，下から上へナデ上げている。外面全体が黒く変色している。内面も灰色に変色している箇所がみられる。胎土は精良で細砂，赤褐色粒子を含み，焼成は良い。色調は，明るい淡黄褐色を呈している。3～6は，手づくねのミニチュア土器である。3は壷



第9図　2号住居跡実測図

で，粘土を皿状にしたものの上に，粘土を帯状にしたものを接いでめぐらせて成形している。内外面共，指押え痕，指ナデ痕が明瞭に残っている。底部は貼りつけで，中央を指で押えて凹ませ上げ底にしている。径は2.2㎝を測る。胎土は精良で細砂，粗砂を多く含んでいる。焼成は良く，色調は赤味を帯びた淡黄褐色を呈する。口径は6.6㎝，器高は平均で8.5㎝を測る。口縁の一部を若干欠くが，ほぼ完形品である。4も壷で，3とほとんど変わらない成形であるが，外面には八ケ目が施されており，胴部から頸部にかけて，巾3.2㎝の黒斑がみられる。底部は上げ底で高い。胎土は精良で粗砂，細砂を多く含み，焼成は良く，色調は赤味がかった淡黄褐色である。口縁部を½弱と胴部を少し欠損している接合資料で，推定口径は5.8㎝，底



第10図　2号住居跡出土遺物実測図

第11図　2号住居跡出土石鏃

径は3.1㎝，器高は平均9.0㎝を測る。5は，甕形土器で胴部を½欠損している。高い上げ底の底部から立ち上がり，口縁部に向って広がっている。底の方にしぼり痕がみられる。内外面共に，指押えの後，指ナデが施されている。胎土は精良で，粗砂を多く含んでいる。焼成は良く，色調は淡黄褐色を呈する。胴部は½弱欠損しており，推定口径8.6㎝，底径3.7㎝，器高平均7.3㎝を測る。6も甕形土器で，上げ底のやや高い底部から，立ち上がって広がり，口縁部でやや内傾している。内外面共指押さえ，指ナデを施しており，外面に巾3.5㎝位の黒斑がみられる。胴部から口縁にかけて，約½を欠損し，推定口径6.6㎝，底径は3.3㎝，器高は約7.5㎝を測る。

石　鏃（第11図，図版12）

この石鏃は，長さ2.35㎝，幅1.0㎝，わたぐり巾0.4㎝，厚さ0.25㎝を計る。石質はチャートと思われる乳白色のやわらかい石材である。わたぐりが小さく，断面形は扁平で薄い。基部に第一剥離面が残っており，打りゅう痕がみられる。側面より，大きい剥離を施して形を整え，尖端に細かい調整がみられる。

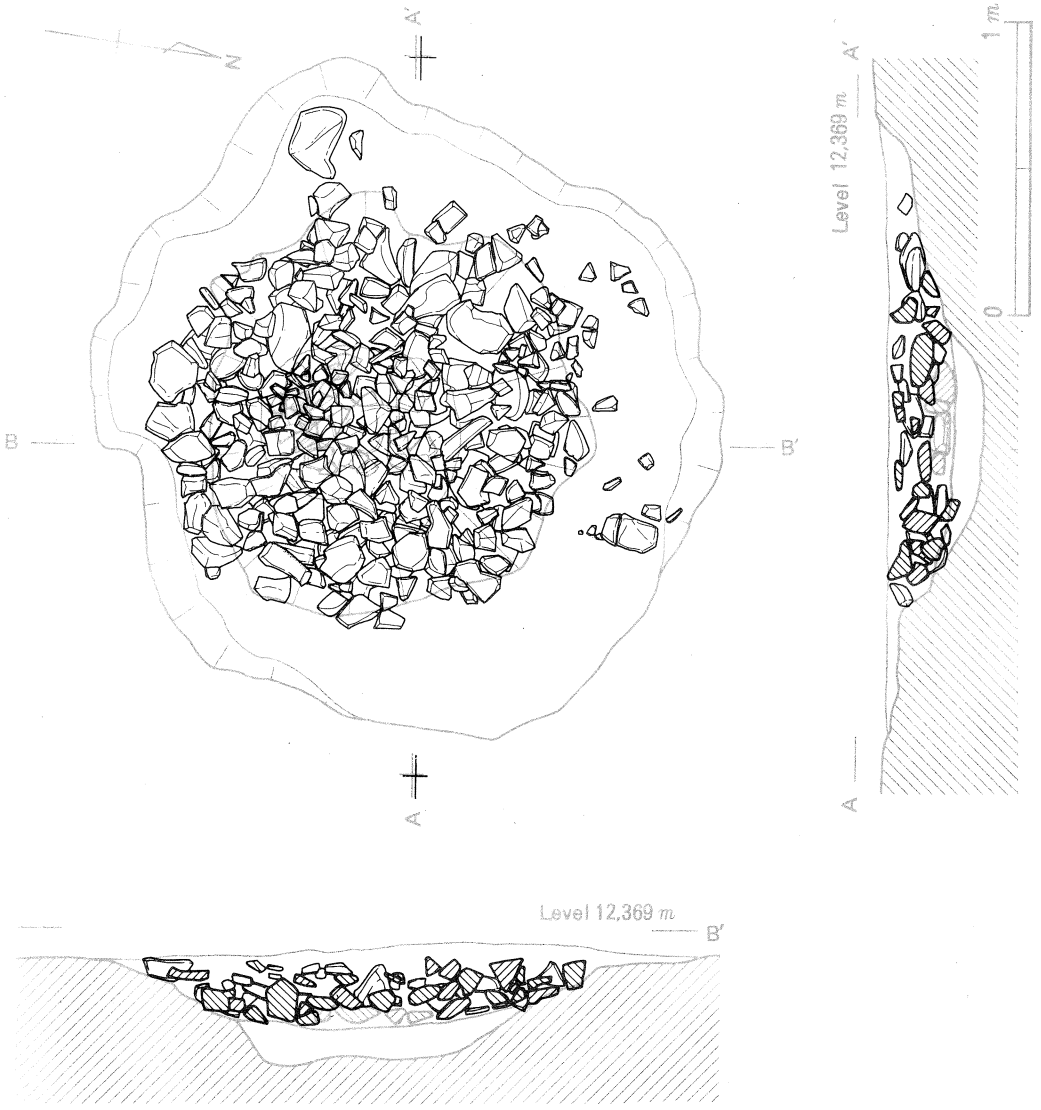
5. 集石遺構（第12図，図版3）

A地区の西，2号住居跡の東に近接して検出されたものである。掘り込みを持ち，径約2ｍ深さ約40㎝を計る。2段に掘り込まれており，こぶし大から20㎝内外の焼けた角礫が多量につまっているものである。埋積土は下部に至るにしたがって，焼土及び炭化物の混入量を増す褐色土で，2段目の掘り込み中においては炭化物を多量に含む黒色土が推積している。

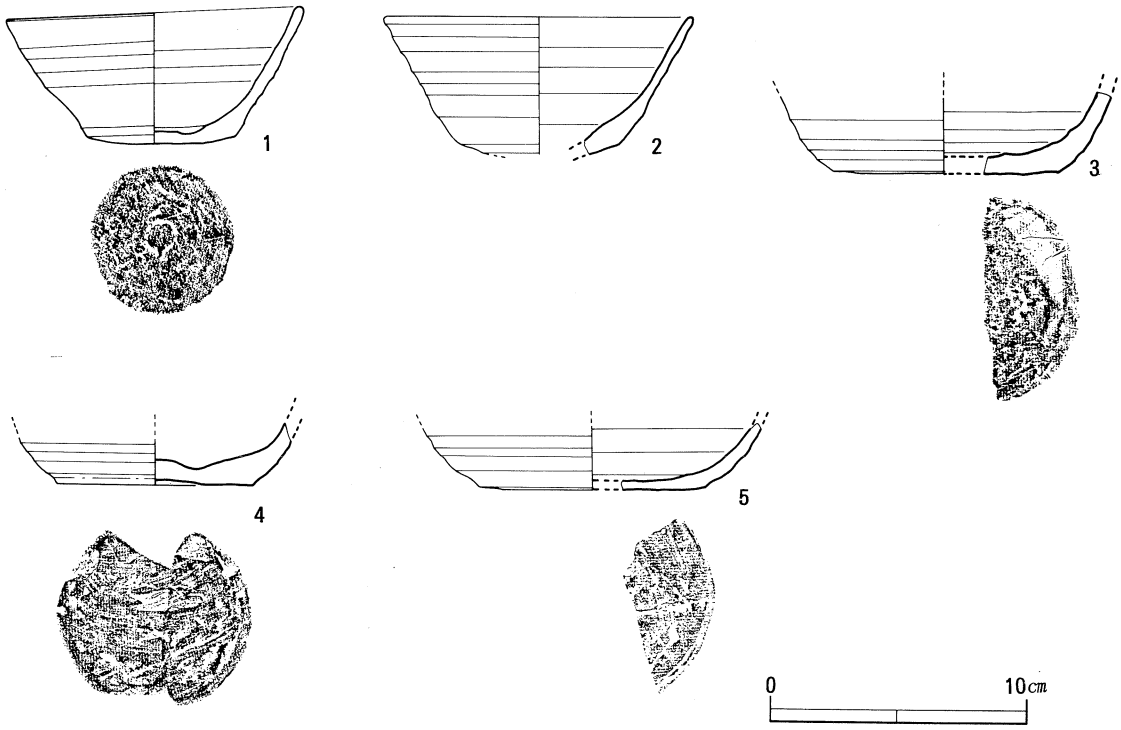
遺物の混入は見られず，時期的なものはとらえ得ないが，赤ホヤ層中に角礫の出土を持って確認されたものである。

近年，県内の調査においても，所謂，集石の出土例が増加して来ている。宮崎学園都市遺跡群，田野町前平遺跡群，日向市越遺跡等がその例に上げられるが，これらはすべて，赤ホヤ層下に位置する暗褐色土層中より検出されるもので，この赤ホヤ層の形成された降灰時期及び供伴遺物をキーポイントとして，この暗褐色土中より検出される集石は，縄文時代早期に位置ずけられている。

今回，本遺跡において確認された集石は，形態的には前記の遺跡のものと同一ではあるが，その掘り込み面の差の持つ意味は大きく，また前記の遺跡等において供伴する押型文，あるいは貝殻文土器等，縄文土器の1片すらも周囲から出土していない事から，時期的に他の集石とは同一視しがたいものである。



第12図　集石遺構実測図



第13図　A地区出土土師器実測図

6. 土　師　器（第13図，図版）

A地区の西半分（緩斜面であるA地区において，やや平坦面を持つ）に集中して若干の土師器の散布が見られた。プライマリーな状態では無く，耕作等により撹乱された表土及び赤ホヤ中より出土したもので，以下，実測可能な遺物を掲げる。器形は坏類のみである。

1は口径11.9㎝，底径5.5㎝，器高5.2㎝を計る完形品で，見込みの深い感じを受けるものである。体部にロクロ成形痕を残し，底部切り離しはヘラ切りによるものである。ヘラ切りの後，ナデ調整が行なわれており，丸みをおびた平底となっている。内面の底部も丸みを持っており，平坦では無い，焼成は良好，色調は内外面共に黄褐色である。

2は体部のみの残存である。推定口径12.1㎝を計る。体部外面に明瞭にロクロ調整痕を残し，内面は回転ナデ調整が施されている。体部下位は内外面共に丸みをおびており，そのまま底部へ続くものと思われる。焼成は良好，色調は内外面共に黄褐色を呈し，体部外面の所々に灰かぶりによるものと思われるうすい釉の付着が見られる。

3は口辺部の残存が無く，口径及び器高の推定は不可能である。推定底径は8.8㎝，底部切り離しは，ヘラ切りによるものである。体部と底部の境付近において，その器壁の厚いものである。焼成は良好，色調は，内外面共に黄褐色を呈する。

4は底径7.7㎝を計り，口径，器高共に不明なものである。体部下位において，底部に接し

てヘラケズリが行なわれており，底部と体部の境は明瞭である。底部は粗雑なヘラケズリが一方向に行なわれており，その為，底部切り離し技法は不明である。内面に火襷が3条残り，重ね焼きされた事がうかがえる資料である。焼成は良好，色調は内外面共に黄褐色を呈する。

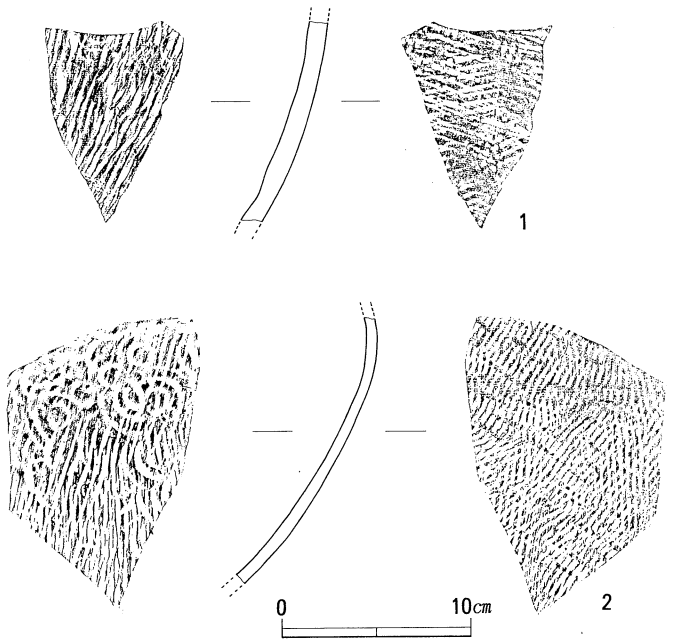
5は推定底径8.7㎝，体部外面にロクロ成形痕を残す。体部と底部の境いは，やや丸みをもっており，底部は，一方向のヘラケズリによる調整が行なわれている。切り離し技法は不明，焼成は良好で，色調は内外面共に黄褐色，他の資料に比でると，本資料は，その胎土に比較的多量の砂粒を含んでいる。

7. 須 恵 器（第14図，図版20）

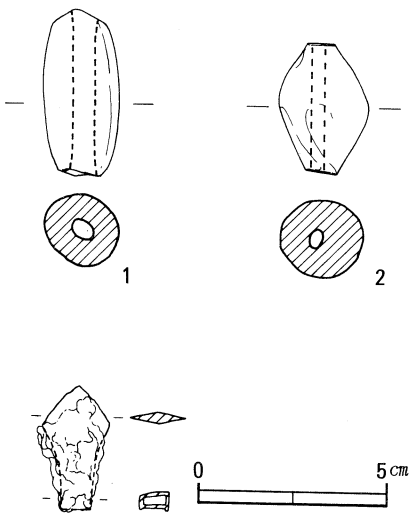
A地区東寄りの援斜面下位付近に，5.6片散在して出土したもので，いずれも甕の体部片である。

1は外面に横方向の平行文タタキが，内面に縦方向の平行文タタキが施されているものである。

2は外面に長方形の稿子目文タタキが施され，外面は，上位に同心円文タタキが，下位に平行文タタキが施されているものである。本資料の外面全体には釉の付着も見られる。



第14図　A地区出土須恵器実測図



第15図　土錘，鉄鏃実測図

8. 土錘，鉄鏃（第15図，図版12）

土　錘

1は，2号住居跡の東2㎝付近より出土したもので，長さ4.3㎝，最大径2㎝を計る。穿孔断面形は楕円形で，最大径7㎜，ほぼ均一に穿たれている。

2は1号住居跡埋積土の最上層より出土したもので，長さ3.5㎝，最大径3.5㎝のずんぐりした様相のものである。全体に指頭圧痕が残り，両端部はヘラケズリにより成形されている。穿孔断面形は楕円形で，最大径約5㎜で，これも均一の径で穿れている。

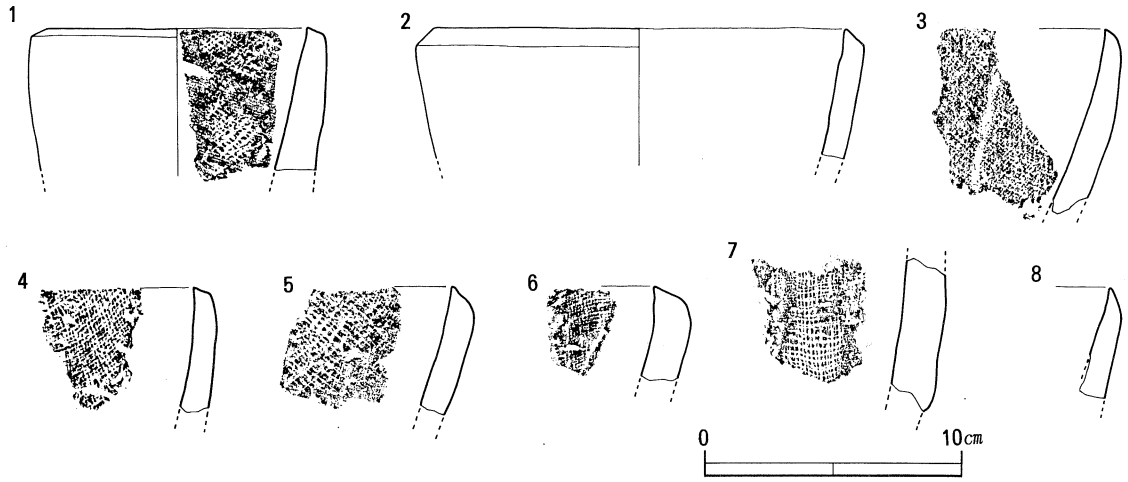
鉄　鏃

A地区の西部，L字状の溝付近より出土したものである。全体的に錆がひどく，もろくなっている。全長は3.3㎝，最大幅1.8㎝を計る。茎部が断面長方形に空洞化しているが，もともとのものであったのか，錆の為であるのかは，不明である。

9. 布痕土器（第16図，図版13）

これらは器内面に，平織布の圧痕のある尖底の鉢形土器の破片であり，A区，C区共に多く出土している。全体に器壁はぶ厚く，胴部から口縁部に向かって，厚みを増すもの，口縁部の方が先細りしているもの等あり，一定していない。口縁端がヘラ状のもので，外側から内側に向かって，そぎ取られているのが特徴である。そぎ取りの角度は，おおむね鋭角にそがれているが，個体によってまちまちで，中には，口唇部が平坦になるくらい，横から直角にそぎ取られているものもある。同一個体においても，その角度はあまり一定していない。またそぎ取った後は，そのままで，ナデなどの調整は施していない。そのため，口縁が波状にでこぼこしたりしている。胴部は，手づくね的な成形で，外面には凸凹が残されている。そのため，全体的に雑なつくり方をしているという印象を受ける。

この布痕土器は，以前はそれ程多くみられなかったが，近年発見例が増加してきており，市内内野々第1遺跡においても，多量の出土をみている。A地区においては，破片が20数点，出土しており，この内比較的破片の大きなもの，口縁部がしっかり残っているもの等，8点を図示した。断面形は，ぶ厚い胴部から斜めに立ち上がって，口縁の方へ先細りしていくものが多い。胎土は，精選されており，きめが細かい。普通の細かい砂粒と共に，1～10㎜大の粗い赤褐色粒子を含んでいるものが多く，やや，ざらざらした手触りである。2と6のみ，赤褐色粒子を含んでいない。2は，割合大きい破片であり，布目もよく残っていたのであるが，他に比

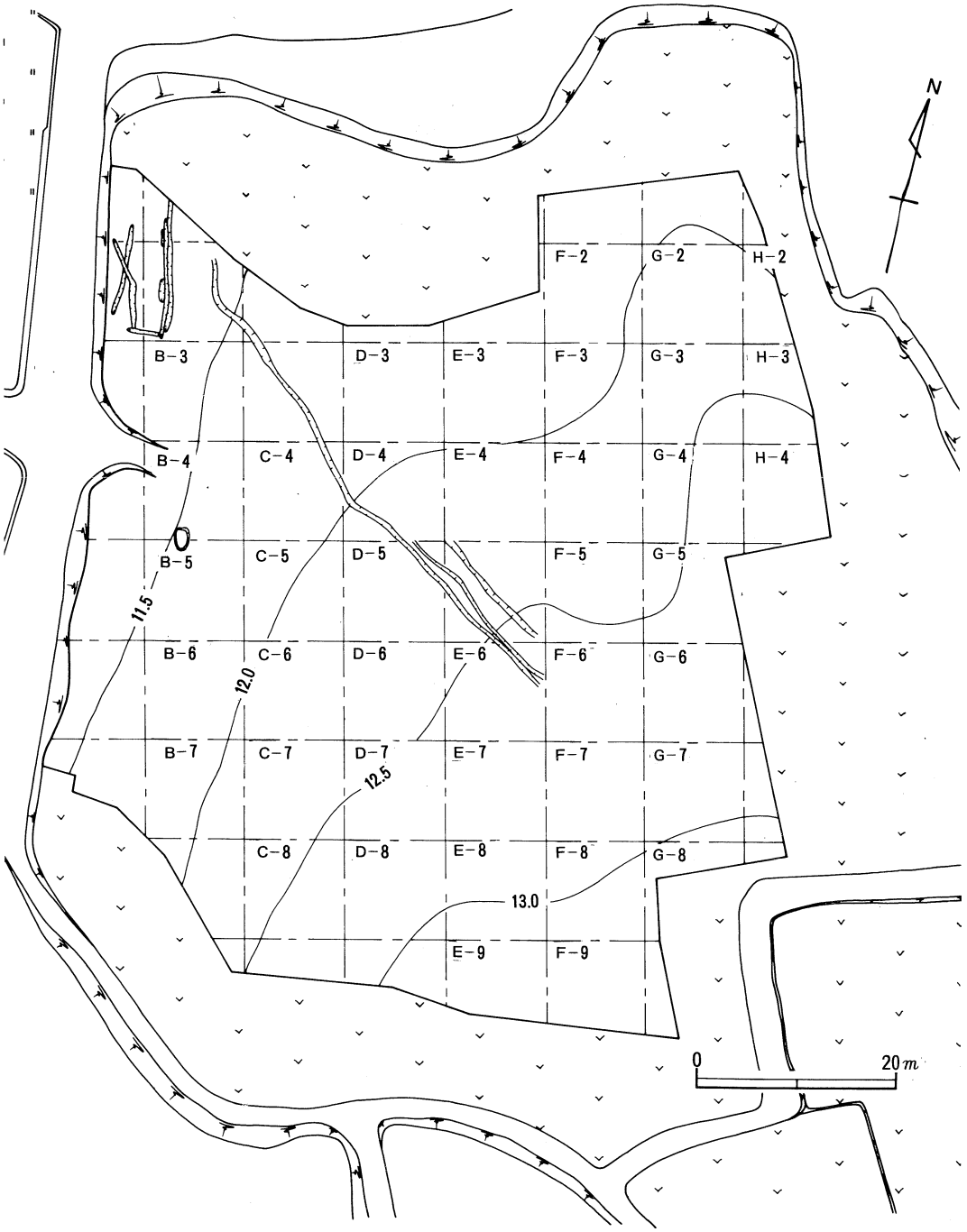


第16図　A地区布痕土器実測図

べて脆くやわらかい上に，これ等の土器は吸水性が大きいため，壊れ易くなり，拓本はとれなかった。

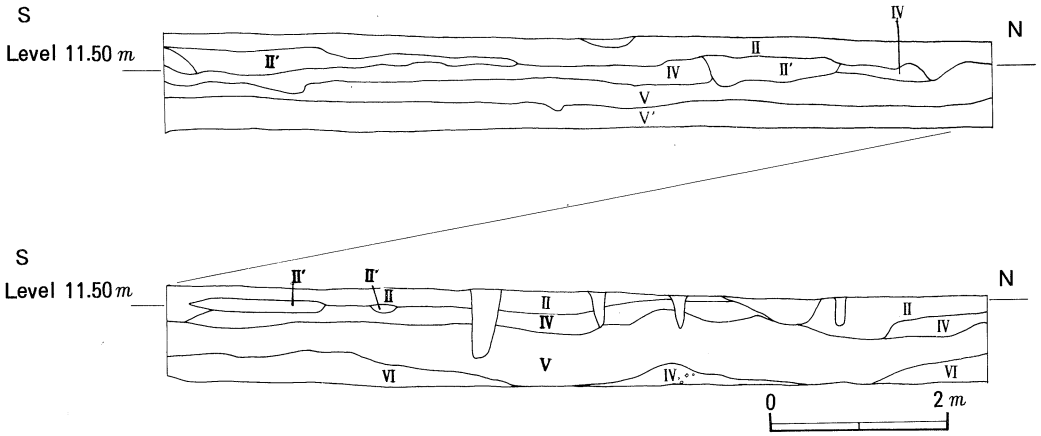
3は，内面の口縁部から胴部にかけて，タテに5㎜幅位の型の圧痕が残されている。7は，胴部で，器壁が非常にぶ厚くできている（1.65㎝）。布目は，はっきり残っており，やや粗めで，図上で下方向へ引っぱられているのが観察される。布目の片寄りに方向性があるのではないかと考え，他の破片も調べてみたが，口縁端に片寄ったものもあれば，その逆向きに，底部方向へ引っぱられているものもあった。全体として，口縁の方向に片寄っているという印象を強く受けた。それで，7の胴部破片は，天地が逆ではないかとの懸念をもっている。

Ⅳ　西ノ原遺跡・C地区

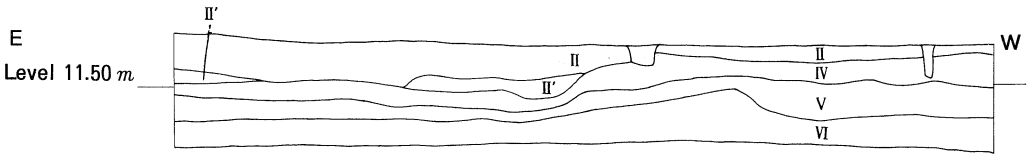


第17図　C地区全体図及びグリッド図

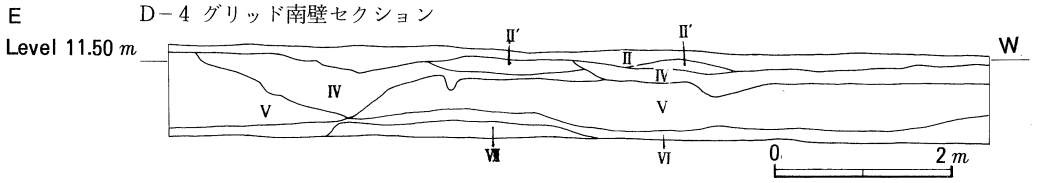
E－5グリッド→E－4グリッド西壁セクション



E－5 グリッド南壁セクション



D－4 グリッド南壁セクション



Ⅱ	第一オレンジ層（赤ホヤ）	
Ⅱ′	〃	黄色砂質土ブロック状に混じる。
Ⅳ	淡黄色砂質土	
Ⅴ	暗褐色砂質土	粘土塊が多く混じる。
Ⅵ	〃	小礫が多く混じる。
Ⅶ	礫　層	

第18図　C 地 区 土 層 断 面 図

1. 縄文土器（第19図，図版16・17）

縄文土器は，C区のうちでも，中央部分から北西端にかけての緩やかな下りに沿って散在しており，特に，北西端の農道沿いには多くみられた。この農道沿いには，黒曜石剥片なども多い。土器は小破片ばかりが，56点ほど出土しており，このうち，22点を図示した。

これらの土器片は，外面に施された文様によって，(1)細い粘土ひもを貼り付けているもの（隆線文），(2)条痕文，(3)沈線文十刺突文，(4)沈線文，(5)その他に分けられ，内部の調整は条痕と，そうでないものとがある。

(1)隆線文（1～3，5，6）―― Ⅰ類

図示したもののほかにも，きわめて小さい破片が6片ほどあり，それを含めていずれも，暗褐色を呈し，外面に多くのススが付着している。胎土には，ごく細かい石英，角閃石を含んでいる。内面はやや明るい茶褐色で，ほとんどに，ヨコ方向に整然と条痕文が施されている。条痕の巾は，2～3㎜，条間は1㎜位で，2～4本が一単位となっている。焼成は良好である。1は，隆線文が，タテに二条施される。このようにタテにはいるものは，図示していない小破片の中に，あと4片（そのうち3片は同一個体と思われる）ほどある。隆線文以外の部位は，貝殻条痕がヨコ方向に施されている。2は，横に一条付けられているが，粘土がうすくて，とぎれている部分もある。うすく粘土をすりつけて盛り上げただけという感じが強い。3は，この隆線文土器の中でも，隆起が凸帯といってよい位はっきりしたもので，断面が三角形を成している。内面は条痕がみられない。外面はヨコ方向にナデている。5は，口縁部で，口縁端部と胴部あわせて，3条の隆起文をつけている。この隆線文も，あまりしっかりしたものではなく，粘土を指などで胴部にすりつけて，一巡させており，線が途中でとぎれたり曲ったり，隆起のしかたも一定しておらず，整然とはしていない。6は，他の破片とちがって，外面にススが付着しておらず，明るい褐色を呈している。これ等の破片については，5の口縁部をのぞいて，図面上の立ち上りは明確さを欠いている。

(2)条痕文（7～9）―― Ⅱ類

7は，石英，角閃石などの細砂粒を多く含み，焼成は良い。色調は外面，暗褐色を呈し，ススが多く付着している。内面は褐色である。内面には比較的整然と横方向の条痕が施され，原体の巾は1～1.3㎝で，その中に3～4本の巾2㎜程度の条痕がみられる。外面は，内面に比べてまばらで，斜め方向に不規則に条痕が走っている。一条の巾が1～2㎜位で3本位づつまとまっているようでもあるが，はっきりしない。この土器は，胎土，色調共に，Ⅰ類の隆線文土器に類似しており，出土地点も一致するため，Ⅰ類の胴部にあたるのではないかと考えている。8は，胎土に細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は，外面が暗褐色を呈し，ススが多くこびりついている。内面は，黄褐色を呈している。口縁端部に，ヘラ状の工具による細い刻目が施されている。外面は，斜め→横の順序で，粗い条痕がみられる。1条の巾が1～3㎜で，条間が1～5㎜で，3本位が一単位のようであるが，箇所によって異なる。口縁付近

では，強く深く施しており，条痕がくっきりとしているが，下位では浅くなっていて，ナデに近くなっている。内面の条痕は，外面に比べて細く，斜め方向に隙間なく施されている。一つの原体の巾は1.2㎝程度で，その中に1㎜以下のごく細い条線が，5本程度みられる。口縁直下に焼成後の穿孔がある。補修孔かと思われる。9は，口縁部で胎土に細かい石英，角閃石などの砂粒を含み，焼成は良く，色調は，内外面共に淡黄褐色を呈している。器面には，横方向に条痕が施されているが，あまり明瞭に残っていない。条痕を上からナデ消しているようである。

(3)沈線文十刺突文（10，11）——Ⅲ類

図示したものの他に，小さい破片が2片ある。いづれも平行沈線文を2～3条引き，それに囲まれた帯状の部分に，刺突文を横一列に連続して施すものである。10は，口縁で，やや波状を呈している。胴部上位から口縁にかけて，緩やかに外反しており，口縁部に至って少し内傾する。口縁部外面は，調整が雑で粘土の継ぎ目が，そのままの箇所があって，横にひびがはいったようになっている。胎土には，細かい砂粒を含み，焼成は良く，色調は，明るい褐色である。11は，胴部破片で，胎土に細かい砂粒（石英，角閃石など）を含み，焼成は良く，色調は赤褐色を呈している。二本の平行沈線文に挟まれた部分に，刻みに近いような刺突文が施されており，それより少し下位に，斜めの沈線文の一部が残されている。10と11では，刺突文に若干の相違があり，10は，棒状の工具の先端で，粘土を刺して丸い点ができるものだが，11は，沈線の間に，つくり出された凸帯ともいえる帯状の区画に，棒状の工具を押しつけて，刻み目に近い状態にしている。

(4)沈線文（12～21）——Ⅳ類

沈線文は，横線と曲線の組み合わせから成り立っており，短い横線を数本平行に，縦，横，斜めに引いた内側の区画に，横線の端部に列点文，刺突文をつけて，わらび手文のようにしたものを一対施したり，鉤手状文などが使われているようである。12は，胎土に角閃石を多く含み，焼成は良く，色調は，外面が暗赤褐色でススが付着している。内面は，明るい赤褐色を呈している。内面の調整は，斜め方向に粗い条痕が施されている。13は，胎土に石英などの細かい砂粒を含み，焼成は良い。色調は，内外面共に明るい赤褐色を呈している。内面は，粗い条痕が施されている。14は，他のものと色合いが若干異なり，沈線文が細めで，深く削れており，条線と言った方がよいような感じがある。平行に二条引き，その下位に斜めにやや太目の沈線を一本引いて，その間の空間にx字状文を施している。胎土には，石英などやや粗い砂粒を含んでおり，焼成はやや良く，色調は外面が淡黄褐色，内面が黒灰色を呈している。内外面共にナデ調整がなされている。15は，角閃石などの細砂粒を多く含み，焼成は良く，外面が暗茶褐色で，ススが少しついており，内面は明るい褐色を呈している。内面の調整は，横方向の粗い条痕であるが，明瞭には残っておらず，下の方はナデになっている。16は，胎土にやや粗い砂粒を含む。焼成は良く色調は，外面が淡褐色，内面が明るい褐色を呈している。17は，ご

く小さい口縁部の破片である。口唇部に斜めに刻み目を有し，口縁直下に太い沈線文を施す。内面は粗い横方向の条痕である。胎土は細かい砂粒を含み，焼成は良い。ややザラザラした手触りである。色調は，淡褐色を呈す。18は，膨みのある胴部の破片で，胎土にごく細かい砂粒を含んでいる。焼成は良く，色調は，内外面共に淡い黄褐色である。内面はナデである。19は，口唇部に刻み目をもつ口縁部の破片で，わずかに波状になるのではないかと思う。刻み目に続けて同じ原体で，器外面に縦に1㎝位，ひきおろして沈線をつけ，直角に曲げて横線にしている。更に，その下に平行に沈線が施してある。内面はナデと，粗い横方向の条痕がみられる。胎土には石英などの，やや粗い砂粒を含み，焼成は良く，色調は内外面共に暗茶褐色を呈する。20は，胎土に石英，角閃石などの細かい砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面共に，明るい黄褐色で，外面がやや赤味を帯びている。内面は丁寧なナデが施されている。21は，山形の波状口縁の破片。山形の頂点より少しずれたところに，ヘラ状の工具を押しつけて，わずかにくぼませている。口縁の直下に横に，細長い楕円を描いて沈線文が施されている。

(5)その他（4，22）

4は，外面にヘラ状の工具によって，縦に短線を刻みつけている。内面にはヨコ方向に，やや粗い条痕が施されている。胎土には細かい砂粒を含み，焼成は良い。色調は外面が，くすんだ黄褐色，内面が暗褐色を呈している。22は，深鉢形土器の底部で，径が推定10.6㎝である。網代底である。胎土には細かい砂粒を多く含み，焼成は良い。色調は内外面共に，明るい赤褐色で，外面がやや灰色っぽくくすんでいる。外面は剥落が著しく，調整は不明であるが，ナデのようである。底部内面は指頭による押さえの痕が残っており，胴部は条痕がわずかに残っている箇所もあるが，他は丁寧にナデられている。

小　結

これらの縄文土器片は，前期及び後期に属する土器である。Ⅰ類としてまとめた隆線文，いわゆるミミズばれ状文のつく土器は，轟Ｂ式系統の範疇で把えられよう。しかし早期末～前期初頭といったような古い時期に比定するのは困難である。Ⅱ類とした条痕文土器も前期にはいると思われる。7は，轟Ａ式とされる土器に類似している。市内では，内野々第1遺跡にも同様の土器片が出土している。[注1] また学園都市遺跡においてもみられる[注2]とのことである。しかし，それらに比較して，若干厚手で，胎土も異なり，口唇部の刻み目がやや太目である。貝殻条痕も前二者に比して，明瞭である。9については，全体のプロポーション，特に口縁の形態から早期のものではないかと思われたが，県埋文センターにおいて宮崎学園都市遺跡の遺物と比較検討した結果，内面調整のあり方が全く異なり，同じものとの判断はつけられなかった[注3]。今後の資料の増加，検討が待たれる。

Ⅲ～Ⅳ類とした土器片は，宮崎県において綾式（Ａ式）とされている土器の範疇でとらえられるものと思われる。時期的には指宿式として把えられるであろうか。後期前葉の土器である。

第19図　C地区出土縄文土器実測図

その他に含めた網代底の底部は，甕になると思われる。いわゆる網代底とは異なるもののようで，粘土で型をとってみると，竹を網んだもののような形状が現われた。いわゆる網代底は後期初頭からその出現をみるが，かなり幅のあるもので，県内では，丸谷第２遺跡[注4]小原遺跡[注5]において，出土しているが，前者は，綾Ａ式の範中でもやや後出の型式とされるものに伴い，後者は，後期～晩期（夜臼）に伴うとされている。県内では網代底の出土はあまり多くなく，今後の資料の増加がまたれる。

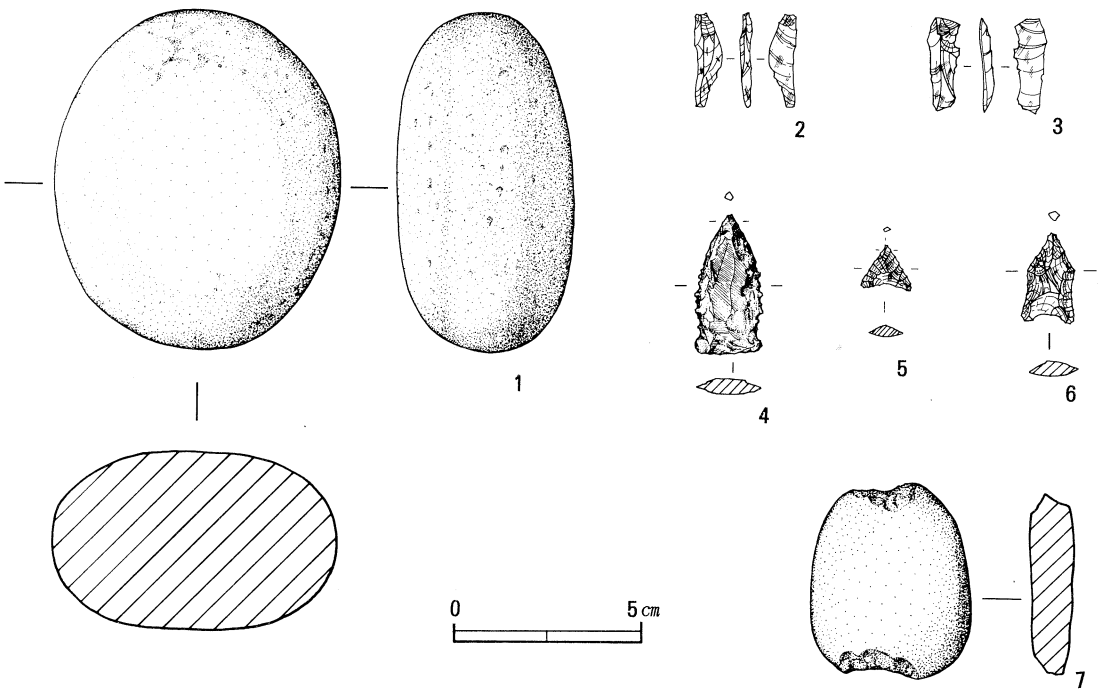
注１　生目台住宅団地計画区域内埋蔵文化財等調査報告書　昭和57年５月
宮崎市教育委員会

注２　宮崎県文化課，面高哲郎氏の御教示によると宮崎学園都市，赤坂遺跡の中に同様の土器が出土しているとのことであった。尚，赤坂遺跡については昭和60年３月に報告書が刊行される予定と聞いている。

注３　注２に同じ

注４　丸谷第２遺跡，都城市丸谷町　九州縦貫道埋蔵文化財発掘調査報告書（３）1979
宮崎県教育委員会

注５　小原遺跡　宮崎郡清武町大字今泉小原　同上



第20図　C地区出土石器実測図

2. 石　器（第20図，図版12）

磨石（1）長さ9.0㎝巾7.6㎝厚さ4.2㎝重さ452ｇ

A－2グリッドの明るいオレンジ層から出土している。こぶし大の，断面形が扁平な円礫である。全体的に磨耗しており，特に中心部が両面共に著しい磨滅が認められ，扁平となる。石質は不明であるが，同様の石質の磨石は田野町又五郎遺跡，学園都市遺跡などでも発見されているとのことである。しかし後述するように，出土地点であるA－2グリッド付近は，耕作等によりかなりの撹乱を受けているため，それらの遺跡と同時期に属する遺物との判断は難しい。

剥　片（2・3）

C区の北西端のA－1，A－2，B－1，B－2グリッド近辺では，集中して黒曜石の剥片，チップ等が多く出土した。この中には姫島産と思われる黒曜石剥片などもみられ，後に述べる石鏃もこの地点で出土している。2は長さ2.5㎝，巾0.7㎝，厚さ0.2㎝を測る。3は長さ2.5㎝巾0.8㎝，厚さ0.15㎝前後を測る。

石　鏃（4～6）

4は，長さ3.7㎝，基部の巾1.8㎝厚さ0.4㎝，重さ約0.7ｇを測る。素材は安山岩質であり，中位から基部にかけての両側面には鋸歯状の加工が施されている。基部に至ると両側面に深い抉りがみられる。両面共，坪を中心にして研磨されている。断面はレンズ状を呈する。

5は，長さ1.2㎝，わたぐり巾1.4㎝，厚さ0.3㎝を計る。黒曜石製で，ほぼ正三角形を呈する。断面形は，レンズ状である。

6は，長さ2.4㎝，わたぐり巾0.9㎝，厚さ0.4㎝，重さ0.2ｇを計る。黒曜石製である。五角形を呈しており，脚がややのびる。基部から中位にかけての両側面は，細かい加工が施され内側に反っている。断面形はレンズ状を呈する。

石　錘（7）長さ5.2㎝，巾4.3㎝，厚さ1.2㎝，重さ40ｇ

砂岩質の小礫の両端を打ち欠いている。扁平でやや楕円形を呈し，ほとんど自然面のままである。同様のものが，58年度の調査の際にも出土している。

以上の石器類はＣ区の中でも丘陵の先端部に属する，北東端の道路脇（Ａグリッド近辺）に多くの出土をみる。同地点は縄文時代前期・後期の土器片などが集中しているところでもあるが，道路法面に露出している土層断面の観察では，礫層がかなり浅いところまで上って来ており，また同一レベルで，それらと共にかなり新しいものが混ざって出土するなど，耕作等によりかなりの削平・撹乱を受けている。そのため縄文時代の遺構等の存在は期待できなかった。

3. 土 師 器（第21図，図版11）

Ｃ地区内において，表土及び撹乱された赤ホヤ層中より，多量の土師器が出土した。これらの内，実測可能な数点を掲げる。

坏

1は口径12.6㎝，底径7㎝，器高5㎝を計るもので，口辺部の1部を欠損している。体部は直線的に立ち上がり，口縁部が若干外反するもので，体部外面にロクロ成形時の稜を数条残す。下位においてナデ調整が行なわれており，底部とゆるやかにつながる。底部にはヘラ切り痕が残る。胎土はやや砂粒を多量に含み，焼成は良好，色調は内面明黄褐色，外面黄褐色を呈する。

2は口径13.2㎝，底径6.8㎝，器高4.3㎝を計る。口辺部の1部を欠損しているもののほぼ完形に近いものである。体部は直線的に立ち上り，口縁部において外反する。体部内外面に数条，ロクロ成形時の稜を残し，体部下位，底部に接してナデ調整が行なわれている。底部にはヘラ切り痕を残す。胎土に比較的多量の砂粒を含み，焼成は良好，色調は内外面共に明黄褐色を呈する。

3は体部の1部のみの残存である。推定口径は12.8㎝，底径，器高は不明である。体部内外面に比較的強く，数条のロクロ成形痕を残し，口辺部の外反は見られない。焼成は良好，色調は内外面共に明黄褐色を呈する。

4は底部及び体部下位のみの残存で，底径12.8㎝を計る。比較的大型の底部である。体部下位において，底部と接してナデ調整が行なわれ，底部も切り離し後にナデ調整されている。

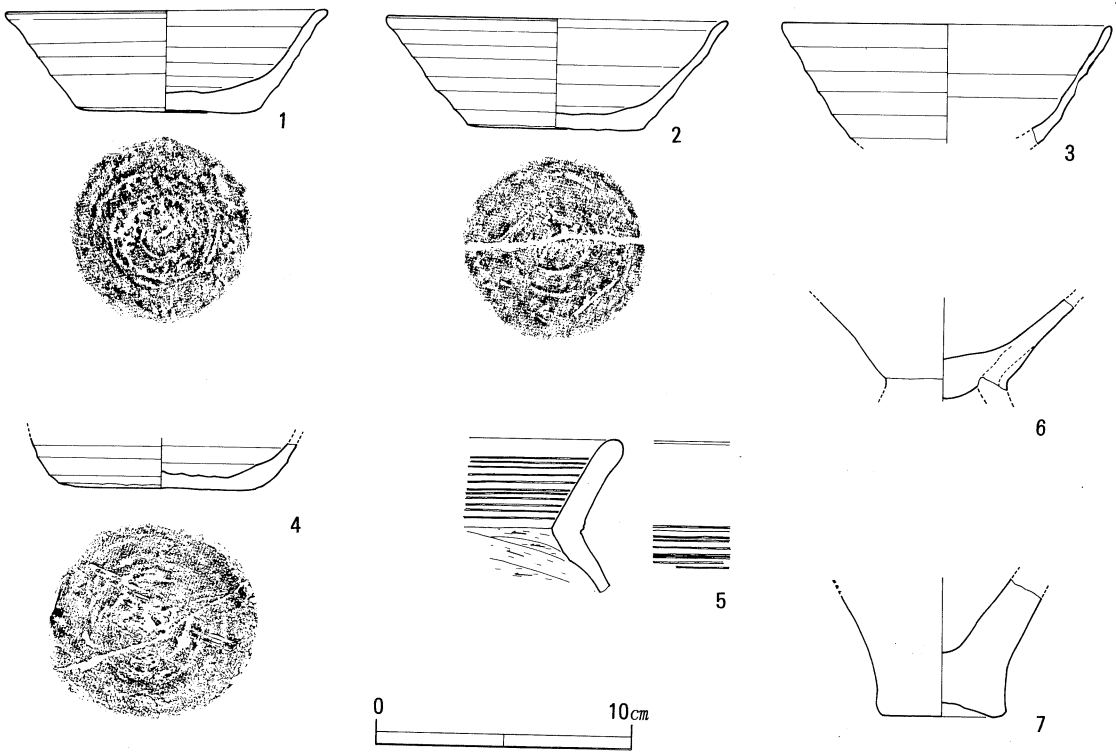
切り離し技法はヘラ切りによるものである。底部にワラ状の圧痕も見られる。焼成は良好，色調は内外面共に明黄褐色を呈する。

そ の 他

5は甕の口辺部である。断面はくの字形に折れ，内面に明瞭な稜を持つ，口辺部内面において，横方向のカキ目を施し，体部内面は口辺部に向ってヘラケズリされている。体部外面の胴部から頸部にかけても横方向のカキ目が施されている。焼成は良好，色調は明黄褐色。

6は高坏である。坏部の下半及び脚部の1部までの残存であるが，剥離状態から，器台状に製作した後，内部を充添した事がうかがえる資料である。

7は甕の脚部で，底径約5㎝を計る。はりつけによるものと思われるが，本項に取り上げたものの，弥生時代まで昇る可能性を持つものである。



第21図　C地区出土土師器実測図

4. 布痕土器（第22図，図版14・15）

A地区において説明したとおり，これらの土器は，内面に平織布の圧痕を残しているものである。A地区のものが口縁に向って器壁が薄くなり，先細りするのに比べ，口縁部の方が胴部よりも，ぶ厚くなるという傾向がある。

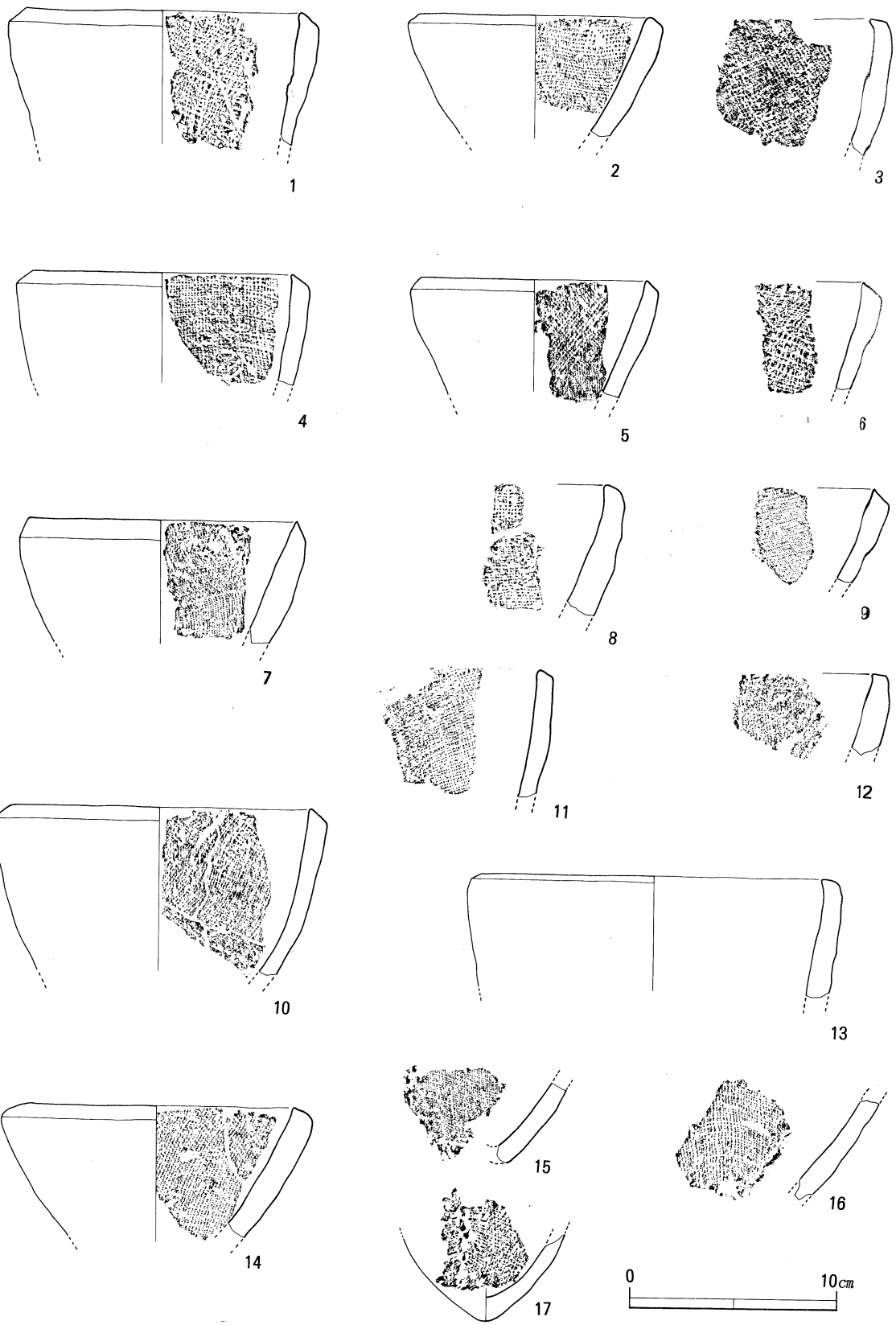
1は，胎土に非常に大きな灰色の砂粒が目立つ。堅くザラザラした手触りで，色合いが，外面上位から口縁端にかけて，やや白っぽくなっており，二次的に火を受けていると思われる。また，内面には，口縁の先端から縦方向に少し曲がりながら伸びた条痕がある。この条痕は，布目がついたあとにつけられ，そのため布目が消えていることから，土器を型からはずす時か，はずした後についたものと考えられる。

2は，口縁端のそぎとり方が，器壁に対して直角に近い方向からなされ，口唇部は，他の土器に比べて，平坦に近くなっている。布目は経糸が左方向に，緯糸は口縁方向へ片寄って波打っており，一部，布の重なりを思わせる箇所もある。

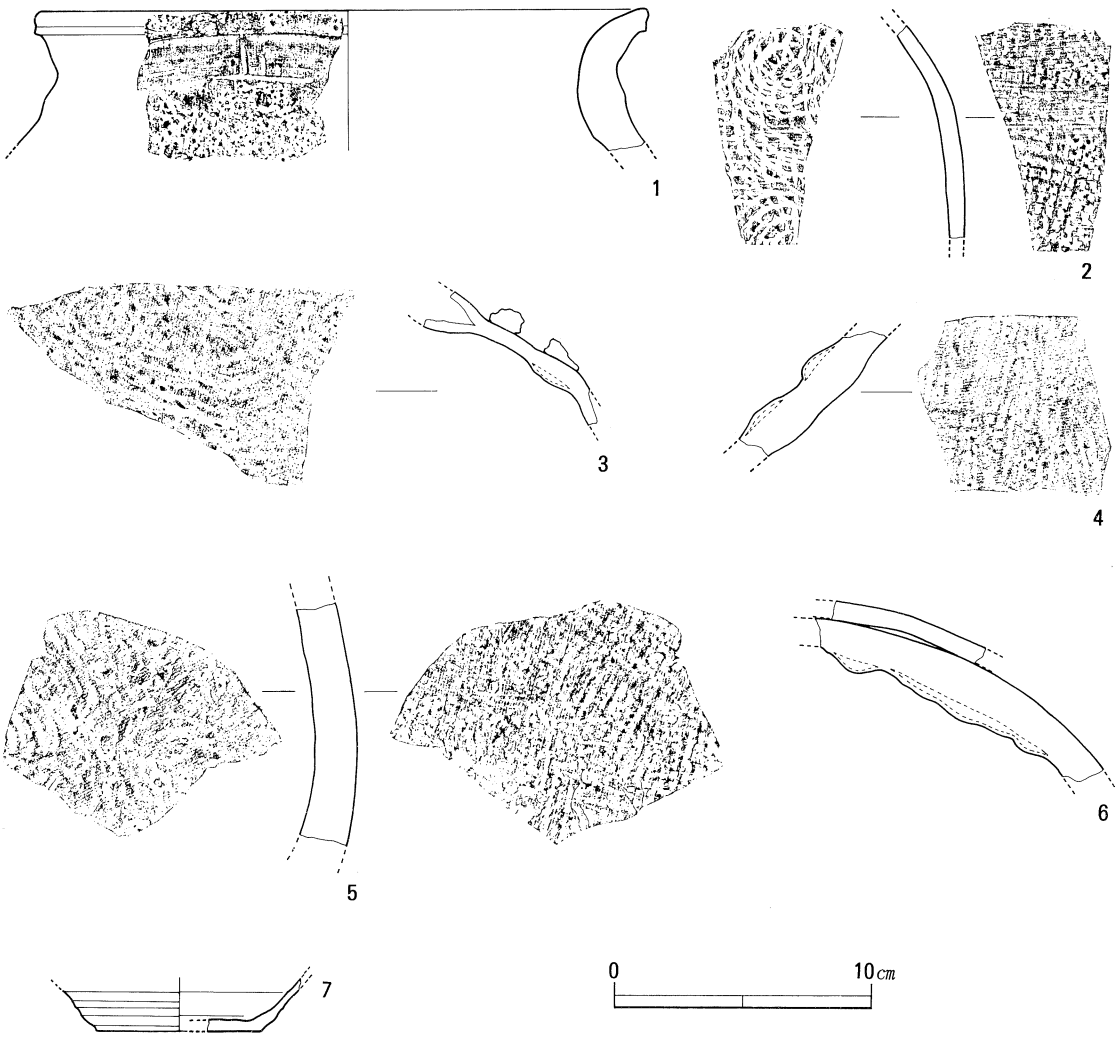
3は，手触りがやわらかく，他のもののような堅くザラザラした感触がしない。赤褐色粒子は大きいものも混じるが，普通の砂粒は，それほど多くない。布目は，口縁に対して斜めになっているが，経糸が若干，左によっているだけで，ほとんど真直である。

4も手触りがやわらかく，赤褐色粒子は大きいものも混じるが，砂粒は，ほとんど含んでいない。3も同様だが，4は，成形，整形ともに他に比べて，丁寧で綺麗に仕上げられている。

5は，1～10㎜の非常に粗めの赤褐色粒子を含んでおり，外面に，ヘラ先のようなもので引いたような条痕がついており，それをナデている。5も3，4と同じく薄手で丁寧につくられている。6は，二次的に火を受けている。布目は口縁付近に細かく，それより胴部寄りの箇所では非常に粗い。二枚重ねられているのかも知れない。7は，布の重なりを示すような痕跡が見られる。9は，布目が非常に細かく整然としている。10は，粗めの赤褐色粒子が含まれており，手触りは，そうざらついていない。口縁のところに，5㎜位の巾で，斜めに長さ2㎝位の棒状の圧痕がある。圧痕には，布目が入りこんでいる。14は，A地区，C地区通じて，最も大きな接合された破片である。立ち上がりが急角度で，小ぶりの鉢形土器である。口径は，推定で13.6㎝位である。C地区出土のものは，薄手のものが多いが，その中でも，ぶ厚い口縁をもち，がっしりしている。胎土には，赤褐色粒子は含まず，灰色の細砂粒を多く含み，ざらざらした手触りである。15，16，17は，底部及びその周辺である。17は，尖底の部分が残っている。内面には，布の重なりの痕跡がみられる。



第22図　C地区出土布痕土器実測図



第23図　C地区出土須恵器実測図

5. 須 恵 器（第23図，図版18・19）

特別，遺構のつかみ得なかったC地区において，D，E，F－5，6，7区付近に散在して若干の出土を見たものである。窯体片の付着したものや，器壁内に空胴を生じているものなど，消費遺跡の出土遺物では無く，生産遺跡において見られる様相を示すものがほとんどである。

1は甕の口辺部である。外面の口縁部及び肩部に，窯体片の付着が少量見られ，器壁内に多数の空胴が生じている。外面口辺部に，ヘラ記号状の沈線文様が見られる。推定口径23.8cmを計る。

2は甕の体部片と思われる。器壁は薄く，外面は格子目のタタキ，内面は同心円文タタキが施されている。色調は黒色を呈する。

3は甕の体部片である。器壁は薄く，著しく空胴を生じている。外面には自然釉の付着，及び，スサ入粘土塊の付着が見られる。内面には同心円文タタキが施されている。

4は甕の体部片である。器壁内に空胴を生じており，外面は格子目タタキ，内面は平行文タタキが施されている。

5は厚い器壁を持つ甕の体部片である。わずかに器壁中に空胴が見られる。外面は格子目タタキ，内面は，ナデ調整が行なわれており，タタキは明確に出来ない。

6は甕の体部片が2点，釉着している資料である。別個体の釉着と思われるが，外面と内面とで釉着しているものである。内側の個体の方のみ空胴が生じている。両方共に外面は平行文タタキ，内側の個体の内面も平行文タタキが施されている。

7は坏である。底部及び体部下位の1部分しか残存していない。薄手のもので，体部外面にロクロ成形時の弱い稜を残す。底部に回転によるヘラケズリ状の痕跡を残すが，切り離し技法によるものか，調整時の痕跡であるかは不明である。推定底径6.5㎝を計る。

6. 58年度予備調査出土の土器（第24図，図版20）

この調査の対象区域であったC地区道路沿い（本調査におけるAグリッド西側）は，耕作等による撹乱が顕著で，遺物をプライマリーな状況では把えられなかった。縄文土器，弥生終末～土師器，須恵器等が出土している。図示した土器は，特に意味のある選定ではなく，比較的大きい破片を取り上げたものである。縄文土器については，本調査の遺物と合わせて整理している。

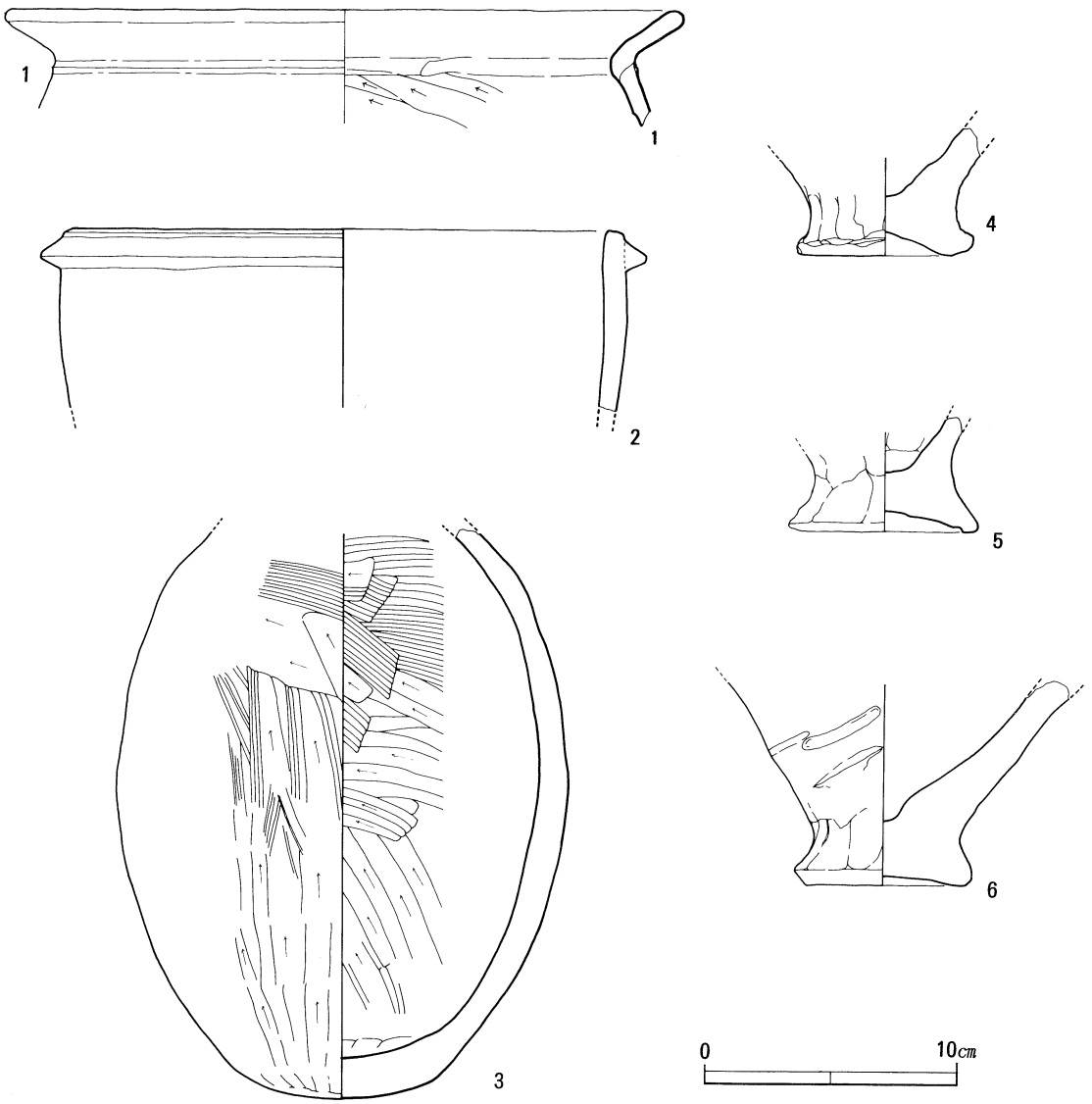
1は，胎土に細砂・粗砂を多く含み，焼成は良い。色調は灰褐色～淡褐色を呈し，推定口径が27.0㎝を計る。口縁はく字形に外反し，端部は丸味を帯び，若干内湾している。頸部に細いつまみ上げの断面三角形を呈する低い凸帯がめぐっている。胴部内面にはケズリに近いナデがみられる。

2は，甕の口縁部破片で，口縁部付近に最大径を持ち，ほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸味をもち，口唇部はヨコナデが施され，平坦である。口縁部直下に帯状に太い三角凸帯をめぐらす。内面には，指頭による押さえ痕が残り，指ナデが施されている。

3は，壷の底部である。溝状遺構底面にはりつく形で出土したものである。丸底に近いレンズ状の底部をもち，長胴となる。胴上半で内湾する様相をみせるが，口縁部は欠損している。おそらく頸部がひきしまり，口縁部がわずかに立ち上ってく字状に開いた短頸壷になるものと思われる。推定の胴部最大径は17.9㎝である。外面には黒斑が胴部の半分位に及んでいる。調整は，細かいハケ目が施されている。底部ではややけずり状を呈する。内面には上半部に巾1～1.5㎝の工具を使用した細かいハケ目が施されている。箇所によっては荒く，ケズリ状を呈するところもみられる。

4・5・6は底部である。3点とも上げ底であり，4・5は貼り付けの底部で，内部に粘土が充添されている。4は胎土に粗い砂粒を含み，焼成は良い。色調は黄褐色を呈し，内面は灰褐色である。底部は横にはり出しており，若干反り上っている。成形は雑で，指でつまみ上

げて，未調整に近く残されている。内面にも指頭による押えがそのまま残っている。底径は7.0cmである。5は胎土に粗砂を含み，焼成は良い。色調は淡赤褐色～黄褐色を呈す。底径は7.0cmを計る。底部内面にしぼり痕跡がみられる。外面はナデ仕上げで，内面はハケ目が施されている。



第24図　58年度予備調査出土遺物実測図

西ノ原遺跡出土布痕土器一覧表

挿図番号	出土地区	胎土	焼成	色調	1㎠あたりの経糸(本)×緯糸(本)	推定口径	備考
第16図1	A地区北東グリッドアカホヤ層上面	細砂粒と1～5㎜の赤褐色粒子を少し含む	良	淡赤褐色	6×8	10.0	
2	A地区南西グリッドアカホヤ層上面	細砂粒を含んでいる。	良	淡褐色	8×7	12.2	脆く拓本がとれず口縁端部のぞき落としが一定でない。
3	A地区北東グリッドアカホヤ層上面	細砂粒(黒色)と1～5㎜の赤褐色を含む	良	赤褐色	7～8×7	不明	布痕が少し磨耗している。
4	A地区北東グリッドアカホヤ層上面	細砂粒，細かい赤褐色粒子を含む	良	淡赤褐色	7×8～7	〃	布目の残りは良い。
5	A地区南東グリッドアカホヤ層上面	細砂粒，細かい赤褐色粒子を含む	良	赤褐色	5×5～6	〃	布痕が少々磨耗している。 胴部より口縁部がややぶ厚い。
6	A地区東グリッドアカホヤ層上面	細砂粒を含む	良	淡黄褐色	7×7	〃	布痕が一部磨耗している。 口縁部がぶ厚い。(1.3㎝)
7	A地区南東グリッドアカホヤ層上面	1～3㎜の砂粒と1～5㎜の赤褐色粒子を含む	良	淡黄褐色	7×4	〃	胴部布目が粗い。
8	A地区南東グリッドアカホヤ層上面	細砂粒1～3㎜の赤褐色粒子を含む	良	赤味をおびた淡褐色	不明	〃	布痕がほとんど磨耗している。
第22図1	C地区E－6アカホヤ層上面	1～7㎜砂粒と1～3㎜の赤褐色粒子を含む	良	淡赤褐色	上8×7 下8×4	13.2	口縁付近は布目が細かく，下位は，口縁部下位において最も肥厚す。
2	C地区E－6アカホヤ層上面	細砂粒，赤褐色粒子を含む	良	淡褐色	上6×6 下8×6	11.0	口縁端のぞき落としが直角に近い。
3	C地区E－6	1～5㎜の赤褐色粒子を含む	良	赤褐色	6×7～8	不明	手ざわりがやわらかい。
4	C地区E－6アカホヤ層上面	1～10㎜の赤褐色粒子をまばらに含む	良好	淡黄褐色	7×8	12.4	他に比べて手ざわりがやわらかい。 口縁の厚味が一定していない。
5	C地区E－6アカホヤ層上面	1～10㎜の赤褐色粒子を含む	良	赤褐色	7×6	11.0	
6	C地区E－5	細砂粒を含む	良	赤褐色	上7×9 下5×4	不明	布目は口縁近くで細かく下方へいくと粗い。 二次的に火をうけていると思われる。
7	C地区E－6	1～5㎜の灰色の砂粒，1～3㎜の赤褐色粒子を含む	良	淡赤褐色	上5×7 下6×9	13.0	布目は口縁近くで粗く，タテ，ヨコに広がっている。
8	C地区E－6	細砂粒を含む	良	淡褐色	7×6～8	不明	布痕が若干磨耗している。
9	C地区E－6	1～10㎜の灰色の砂粒を含む	良	赤味をおびた淡褐色	11×10	〃	布目が非常に細かく密である。
10	C地区E－6	1～10㎜の赤褐色粒子を多く含む	良	明るい赤褐色	7×7	12.6	布目が著しく磨耗している。
11	C地区E－5	細砂粒，赤褐色粒子を含む	良	淡黄褐色	9×5	不明	口縁端のぞき落としが一定でない。
12	C地区E－5	細砂粒を多く含む	良	淡褐色	7×6	〃	布痕の磨耗が著しい。
13	C地区E－6	1～5㎜の赤褐色粒子を含む	良	淡黄褐色	7×7	16.0	脆く拓本がとれず
14	C地区E－6	細砂を含む	良	赤味をおびた淡褐色	6×11	13.6	口縁端のぞき落としの角度が一定していない。
15	C地区E－7	1～5㎜の灰色の砂粒及び赤褐色粒子を含む	良	淡黄褐色	10×10	不明	底部付近の布目が細かい。
16	C地区E－6	細砂粒1～5㎜の赤褐色粒子を含む	良	淡褐色	6×7	〃	尖底部分，
17	C地区E－6	1～5㎜の赤褐色粒子を含む	良	赤味をおびた淡黄褐色	7～8×7	〃	尖底部分，布の継ぎ目痕がみられる。

V　西ノ原遺跡の土器とその位置

小　田　富　士　雄

西ノ原遺跡A地区及びC地区の出土土器は，所属遺構によって，次のように四大別することができる。

(1)　A地区1号住居跡

(2)　A地区2号住居跡

(3)　A地区焼成土坑

(4)　C地区包含層

そこで整理にあたっては，まず上記遺構別に分け，ついで調査当事者によって混入したもの，及び混入の可能性あるものを除いてもらった。かくして，厳正に選択した土器によって，各遺構の時期を判断する方法をとることとした。

1.　A地区1号住居跡の土器

甕形1と高坏形2がある。甕形土器は，ほとんど直線に近く，底径6センチばかりの平底の器体に，緩やかに外傾するやや延びた頸部を付した長胴甕である。刷毛目と箆削りによって，器壁を一様な薄手造り仕上げていて，弥生終末期以来の在地系の器形を踏襲しながらも，実用的には一段と進んだ技法をみることができる。

高坏形土器は，大形完形品と小形脚部が共伴している。前者は脚柱径が大きく，坏部とのバランスを崩しているが，エンタシス状の柱状部と，稜をなして外反する裾部には，4～5孔がめぐって，なお5世紀代の外来系高坏の形式を踏襲している。後者は，棒状に近い細形脚柱に幅広い裾部がつき，表面には横方向の箆調整が入念に施されていて，5世紀代より下らない技法と考えられる。市内浄土江遺跡[(1)]の土師器と対比してみると，明らかに先行する位置づけがなされる。したがって，本遺構は5世紀後半代より下らない時期に，比定されるであろう。

2.　A地区2号住居跡の土器

壷形1，鉢形1，ミニチュア土器4がある。壷形土器は，上半部を欠いているが，長胴倒卵形で，ややふくらみのある径4センチ弱の平底となる。内面は上下方向，外面は斜めあるいは，横方向の箆調整によって仕上げられている。鉢形土器は，平底半球形器体に，急激に外反する短頸がつく。内面は刷毛目，外面は指なで調整で仕上げているが，詳細にみると，外面の所に斜め方向の叩き痕跡が残されている。ミニチュア土器は，壷形2，鉢形2で，やや荒い仕上げにもかかわらず，その器形的特徴をよく伝えている。

これらの土器の特徴と組みあわせは，市内中岡遺跡[(2)]上層土器と，共通するところがまず指摘されるが，壷，鉢の調整技法などには，すでに弥生土器の規制をはなれて，土師器段階に踏みこんでいるであろうと考えられる。中岡遺跡の最上層土器の時期も，弥生終末期を主体として，その下限は土師器段階にまで，踏みこみつつあった状況がみられたが，本遺構の土器群もこれと並行するか，あるいは，これに直続する時期に比定されるであろう。

3.　A地区焼成土坑の土器

この土坑内から発見された土器は，破片も多いので正確な個体数は，上述の住居跡資料のよ

うな正確さは期しがたい。また灰層が堆積し，窯材を思わせるような藁入りの赤く焼けた焼土片，土器製作にあたって成形時に削り取られたと思われる。粘土紐状の土屑などが収集されていて，近傍で製作した土師器を，本土坑で焼成した窯跡であることが知られる。焼成された土師器には，坏形と椀形の器種がある。この他に，甕形の口縁部片がみられるが，本遺構での焼成品と認定するには至っていないようである。

坏形は三種に大別される。1類は，底径5.5センチの厚手平底で，直線に外傾する器体が着く。器壁の内外には，荒い回転調整の痕跡が重層的に，明瞭に残されているのが特徴である。焼成品中には，叩けば高調音を発する硬質（須恵器）土器に近い仕上りのものもある。

2類は，底径5～8センチの平底で，1類と異なり，器壁は最終的になで仕上げされており，坏部も深い。底部からの立上りは，端部が丸味をもった仕上げとなるところが特徴であろう。

3類は，完形をうかがう資料がないが，底径6センチの平底で，側面が厚いので，やや腰高の感を抱かせる。椀は径7～7.5センチの断面三角状の高台を付したもので，完形資料はない。高台を付して仕上げる際に，底部の中心に向けて放射状に，指頭調整を加える技法がよく残されている。この独特の調整法を手がかりとして，将来需供関係を追求する方法は有効ではあるまいか。本窯跡の土師器は，いずれも篦切はなし技法であり，器形，技法などから9世紀後半代から10世紀前半代のあたりに位置づけられるであろうと推察できるが，本遺跡と対向する近くにある学園都市遺跡の，住居跡から類品が出土している。そこで，目下整理中の資料を，宮崎県埋蔵文化財センターの御好意で，本資料と照合することができた。坏2類，3類と椀を共伴しており，更に越州窯鉢，緑釉陶皿などの伴出している事実を知らせされた。また坏1類は延岡市莓田窯跡[3]，宮崎市内野々第Ⅱ遺跡1号住居跡[4]などの，須恵器椀とも近似した製作技法であることがうかがわれ，あい近い時期であろうことが知られるのである。

4. C地区包含層の土器

ここで発見されている土器は，坏形と甕形に大別できる土師器である。数個体を数える坏形は，同一類に分類されるもので，底径7センチ，高さ4センチ，口径13センチ弱の，ほぼ同一規格品とみられる。篦切りはなしの後に，やや丁寧ななで仕上げされ，器壁も回転なで仕上げされていて，A地区焼成土坑の坏類に比べると，一段と入念な製作である。

甕形は「く」字形断面の口縁部破片1個があり，直線的に反転する短かい頸部は厚く，内面に深い回転カキ目痕が明瞭である。器体部の肩部内面は，斜め方向の削りが荒く施されて，頸部に比べて著しく薄手造りとなる。

坏形，甕形にみられる上述のような特徴は，まだ8世紀代土師器の技法を踏襲したものといえ，A地区焼成土坑の土師器に，先行する9世紀代土師器として位置づけることができよう。

註 (1) 野間重孝編『浄土江遺跡』（宮崎市文化財調査報告書第6集）1981

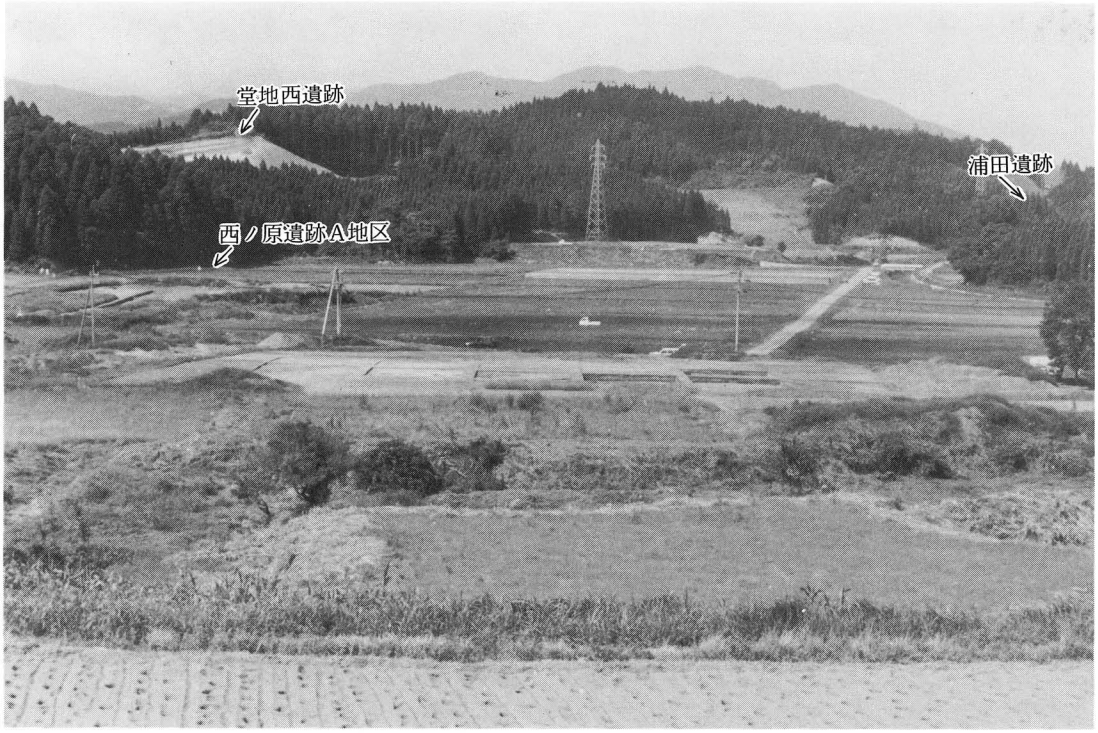
(2) 野間重孝編『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅰ』1984

(3) 小田富士雄「延岡市莓田窯跡」（『宮崎県文化財調査報告書第26集』）1983

(4) 野間重孝編『生目台住宅団地計画区域内埋蔵文化財等調査報告書』1982

図　版

図版1

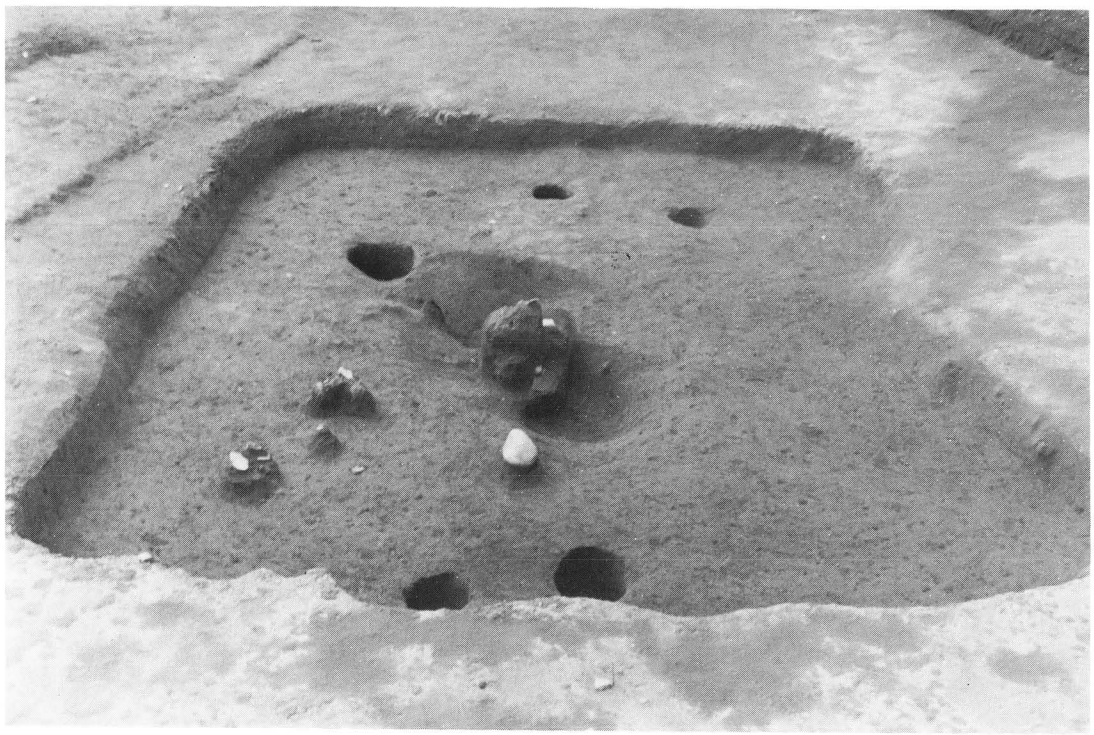


西ノ原遺跡・C地区全景

西ノ原遺跡・A地区全景

図版 2

A地区　　1　号　住　居　跡



A地区　　2　号　住　居　跡

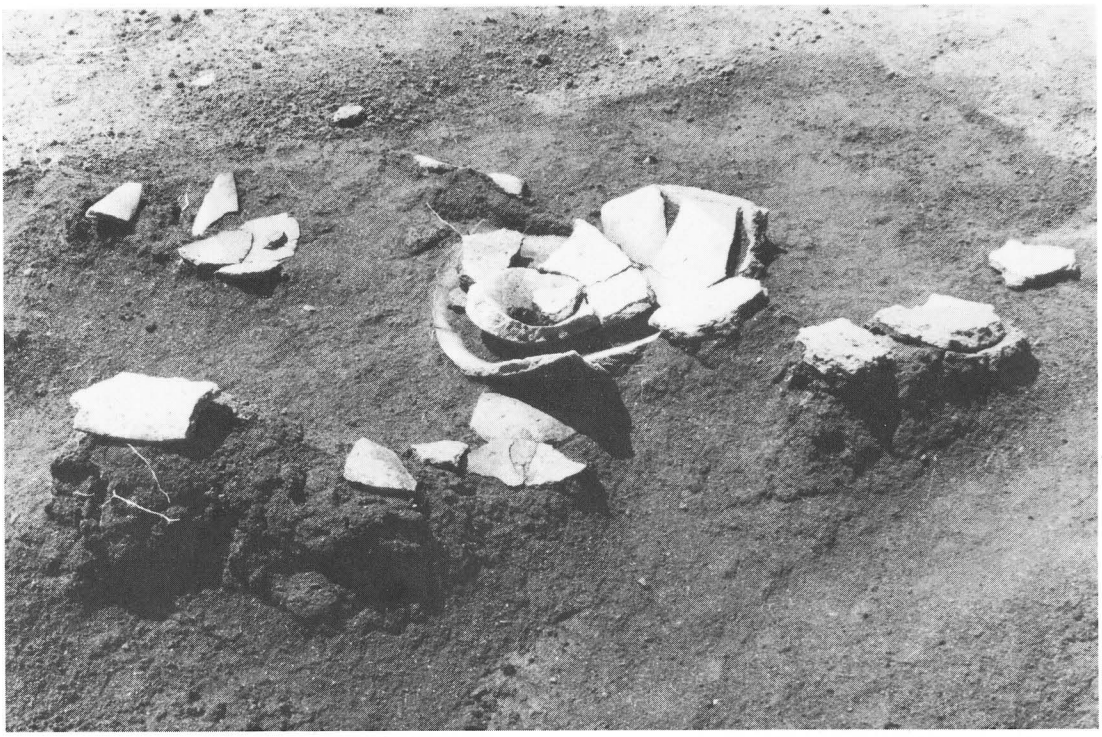
A地区　　焼　成　土　坑

A地区　　集　石　遺　構

図版4

A地区　　土器出土状態

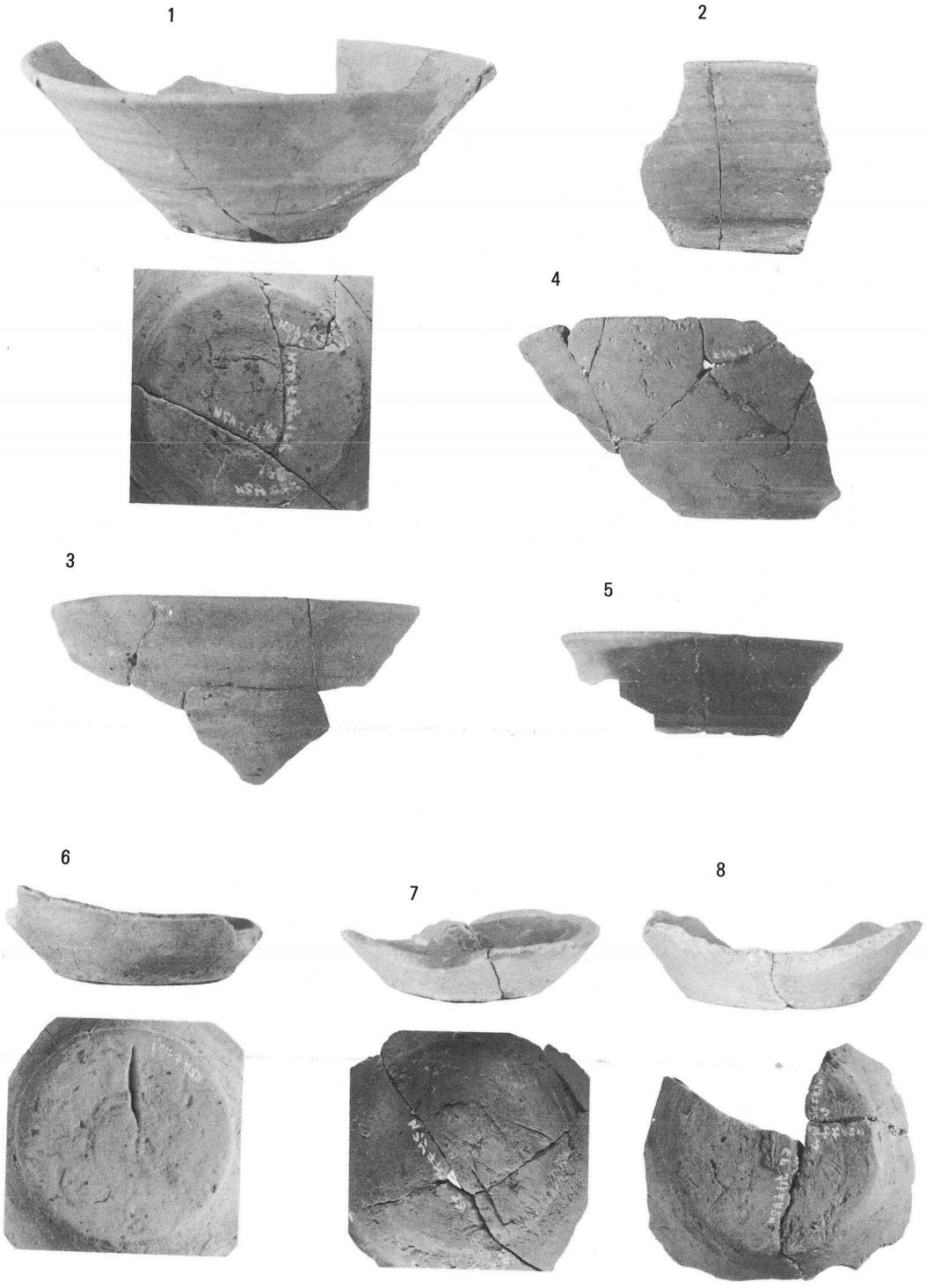
A地区　1号住居跡内土器出土状態



A地区　2号住居跡内土器出土状態

A地区　集石検出作業風景

図版6



A地区　焼成土坑内出土遺物

9

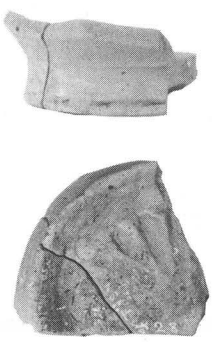
10

11

12

13

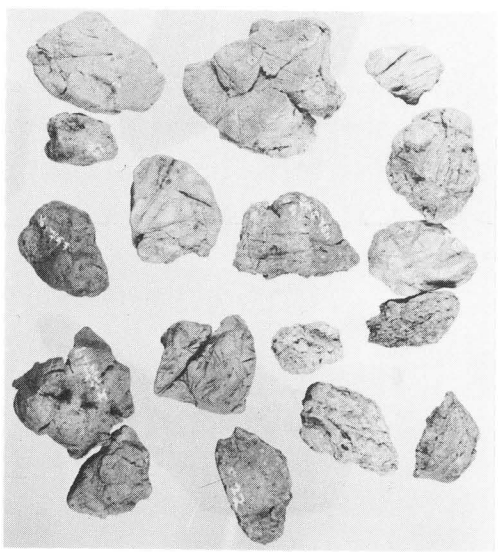
14



15

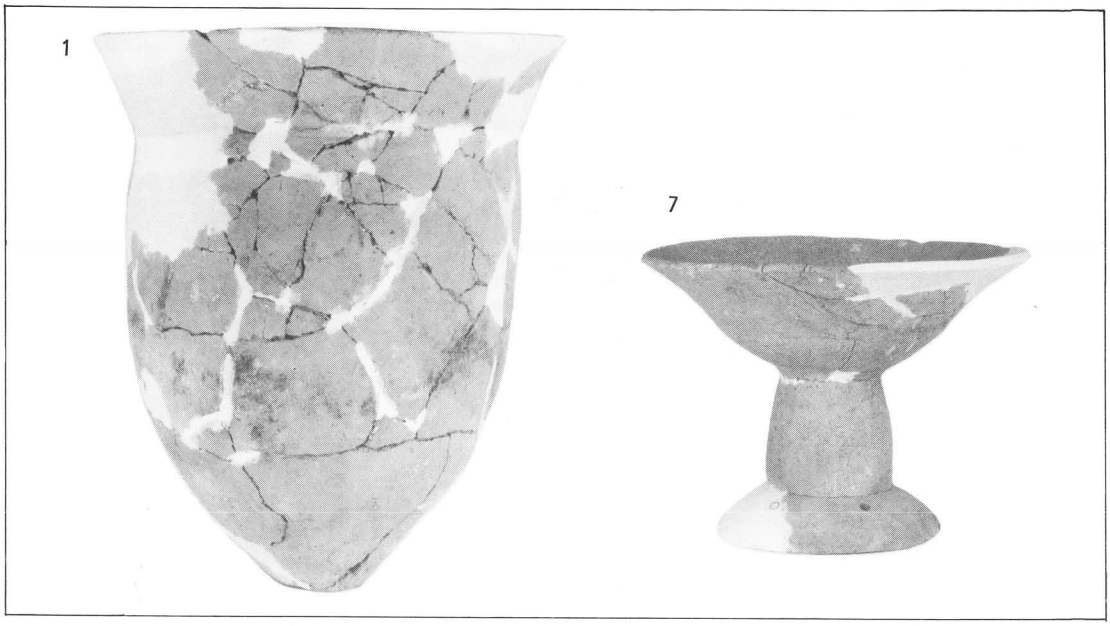
16

17

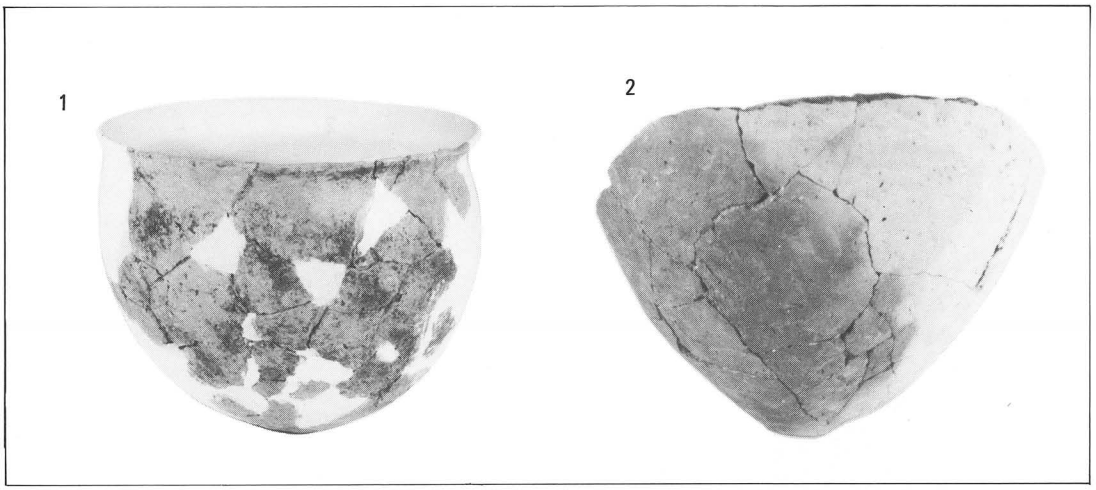


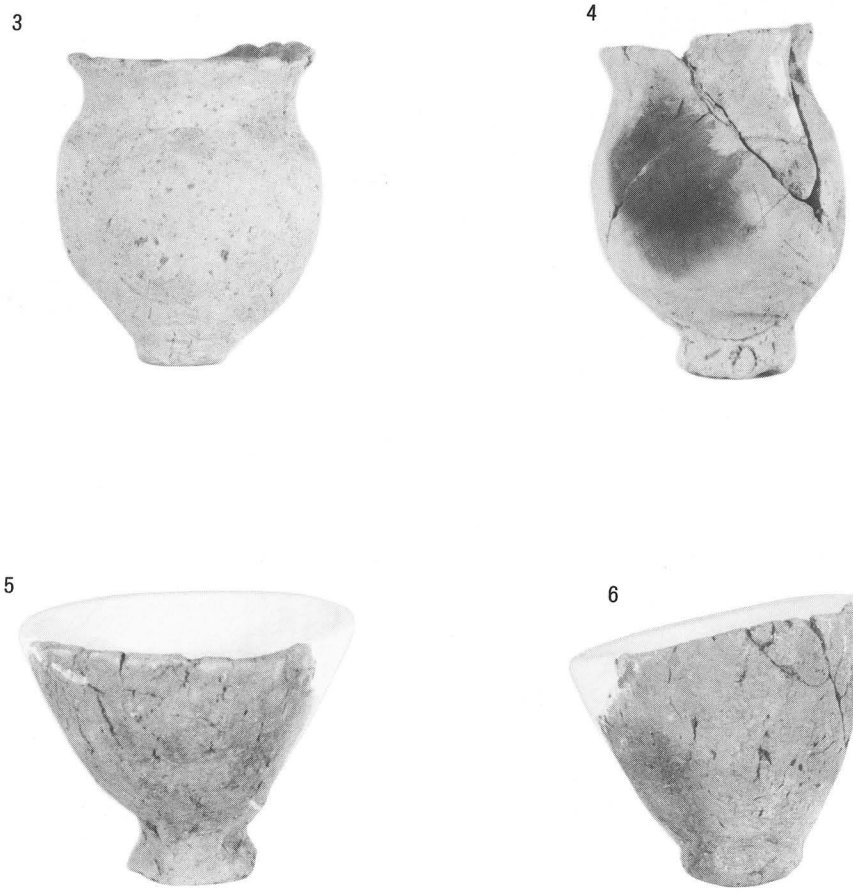
A地区　焼成坑内出土遺物

図版8



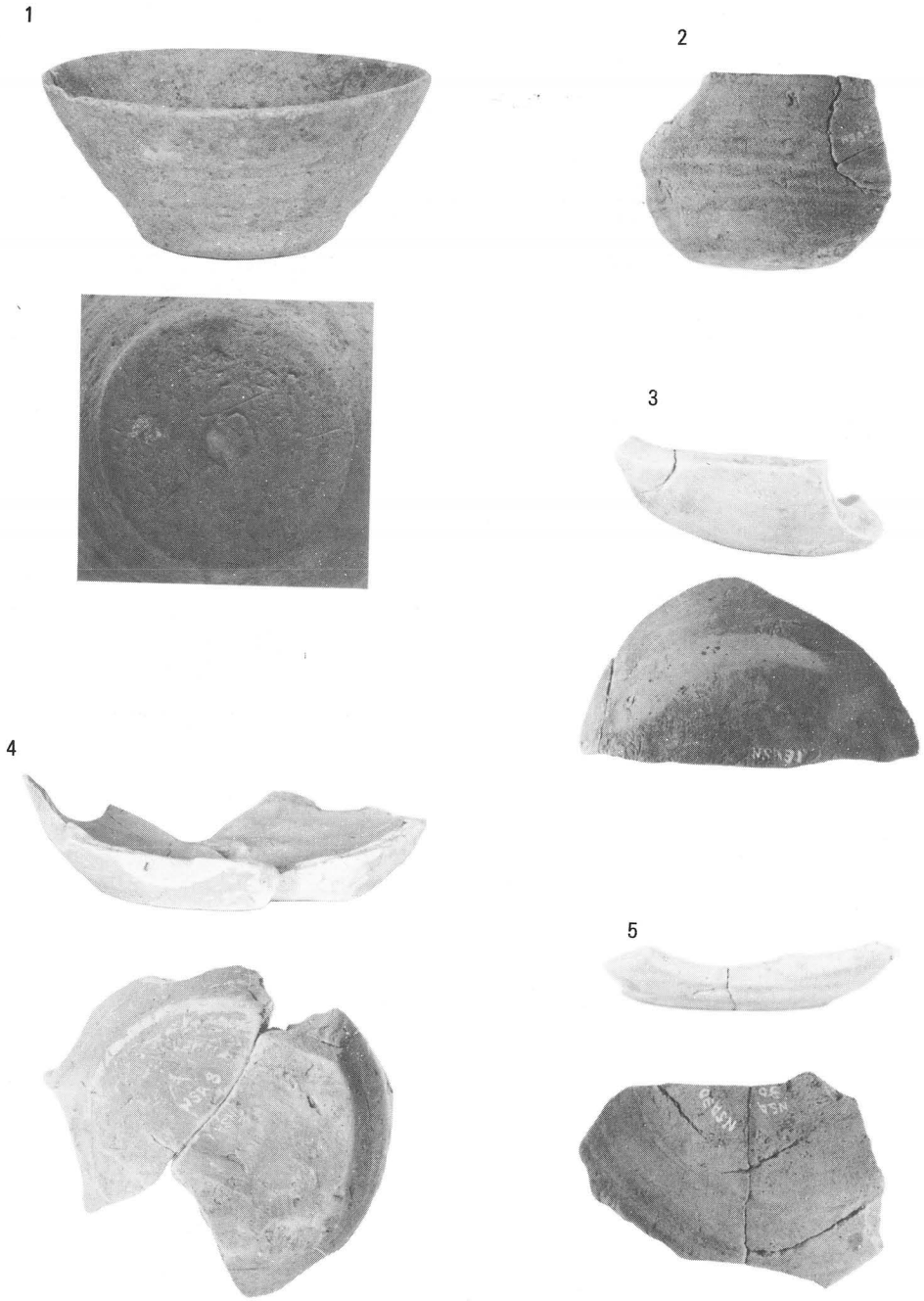
A地区　1号住居跡内出土土器



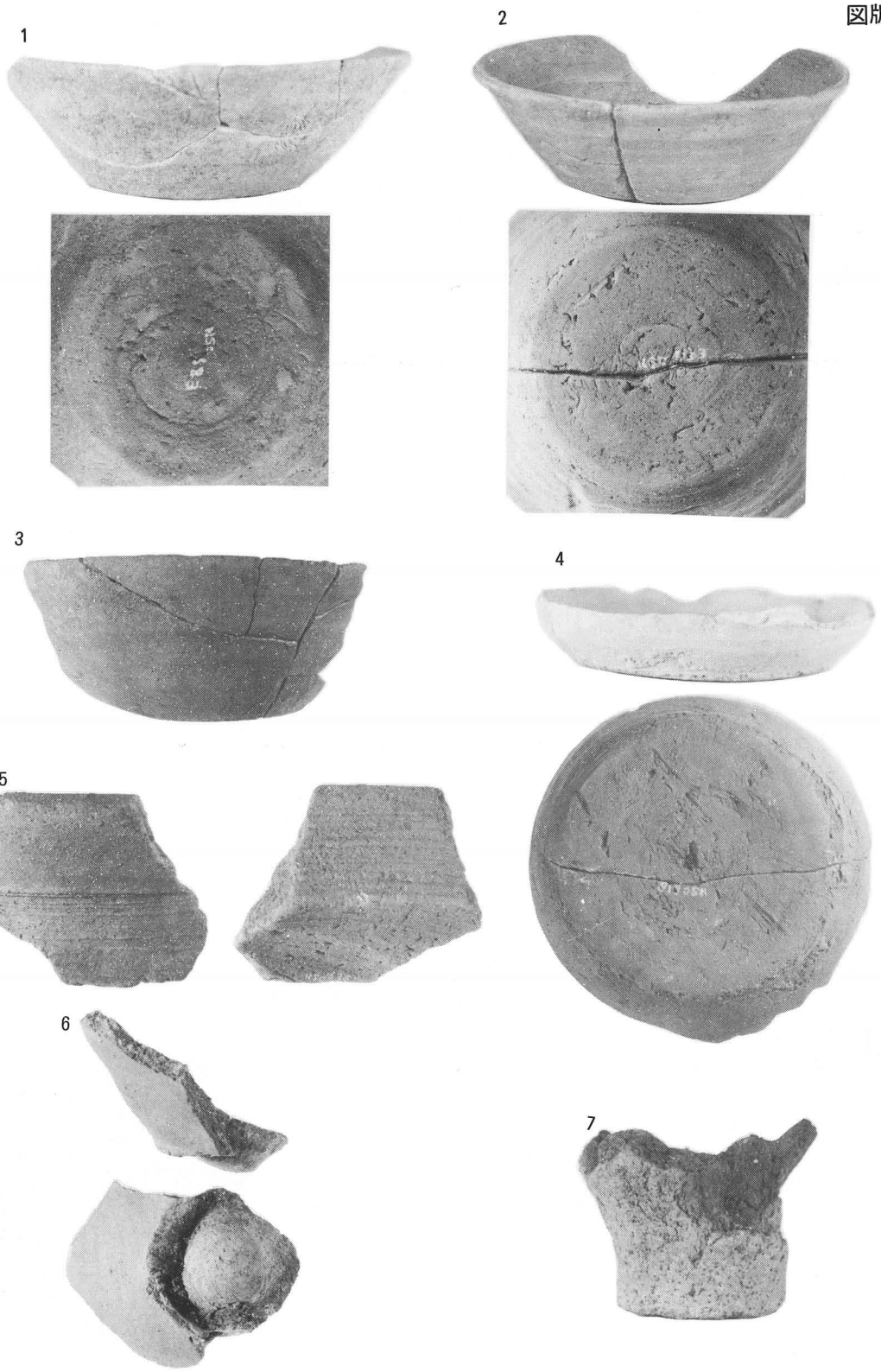


A地区　2号住居跡出土土器

図版10

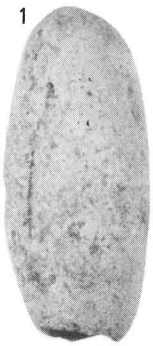


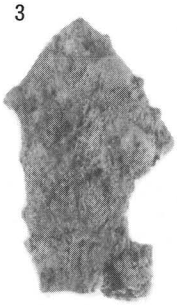
A地区　出　土　土　師　器



C地区　出　土　土　師　器

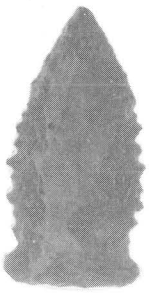
図版12





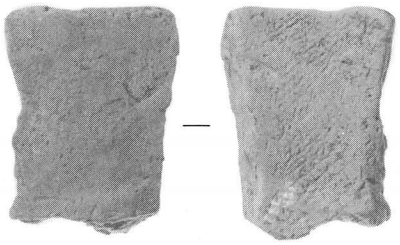
A地区出土遺物（土錘，鉄鏃）

2号住居跡出土石鏃

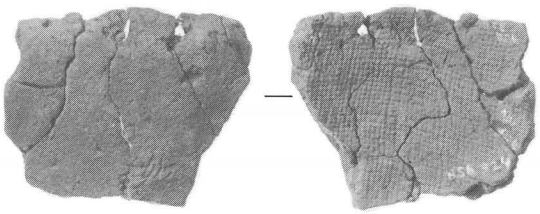


C地区 出 土 石 器

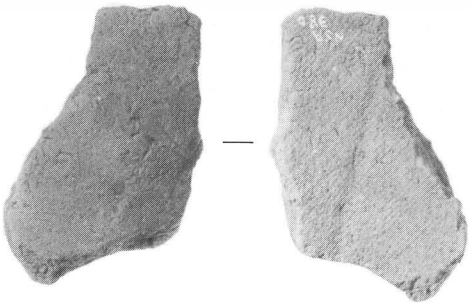
1



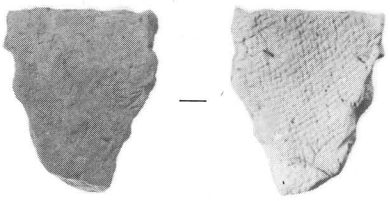
2



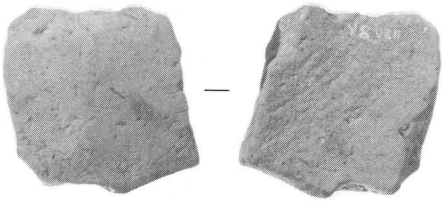
3



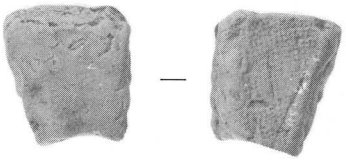
4



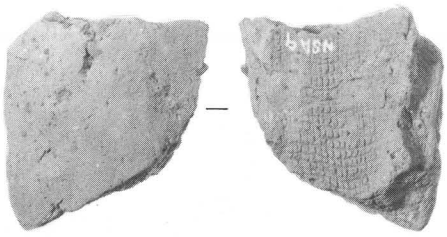
5



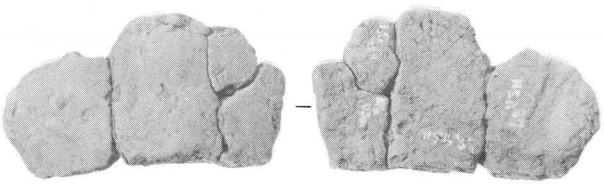
6



7

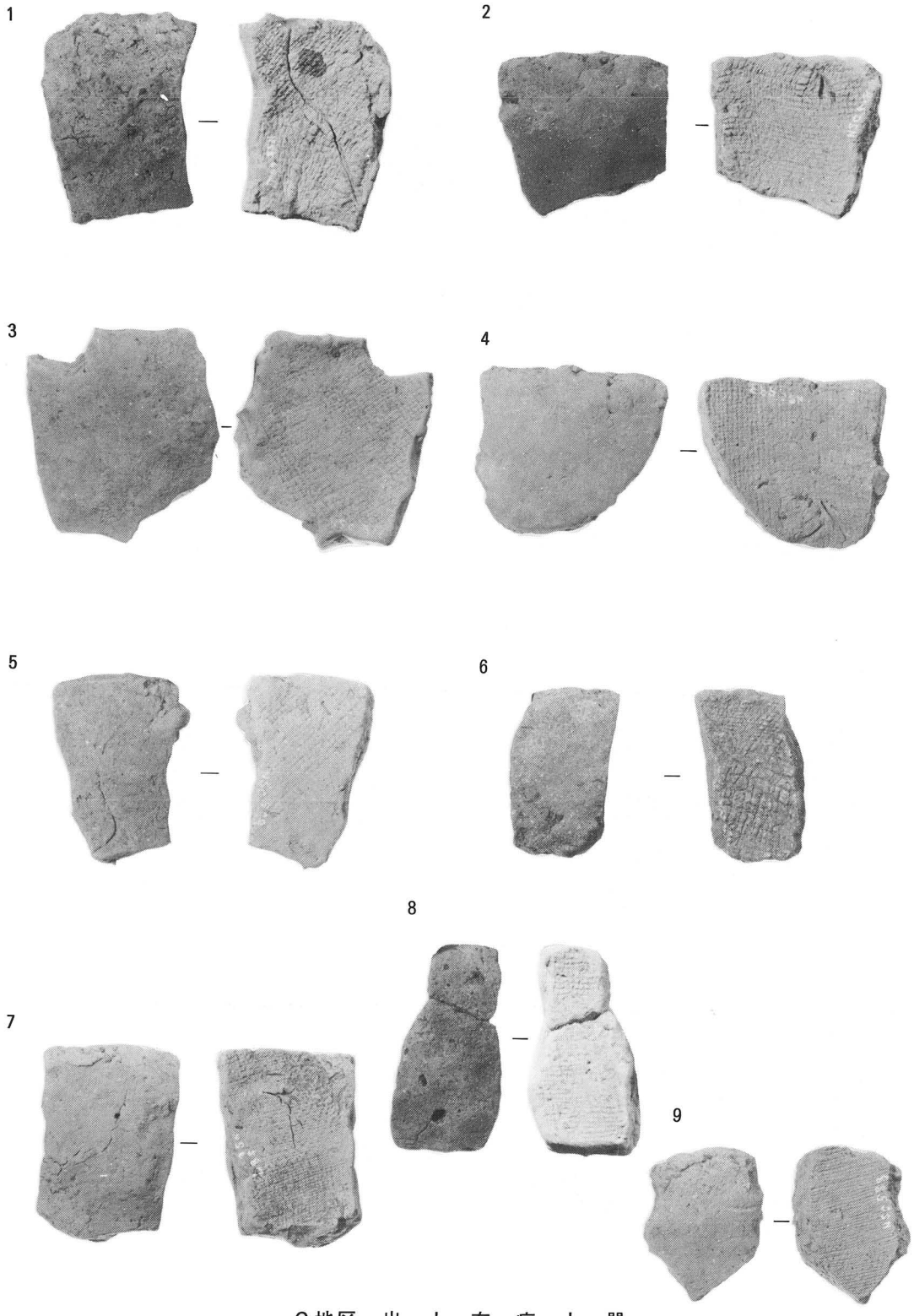


8



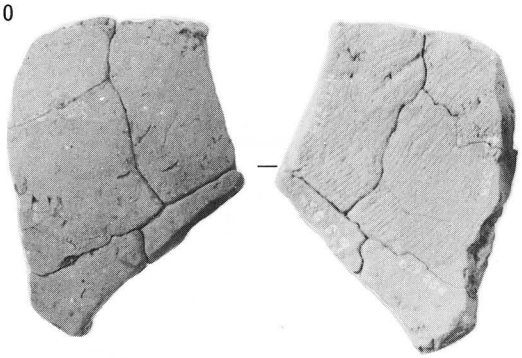
A地区　出　土　布　痕　土　器

図版14

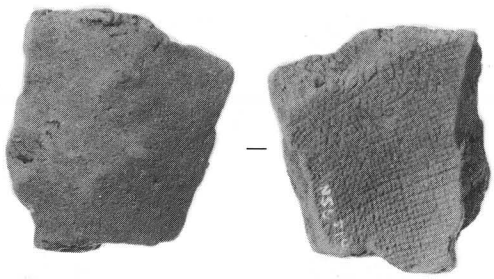


C地区　出　土　布　痕　土　器

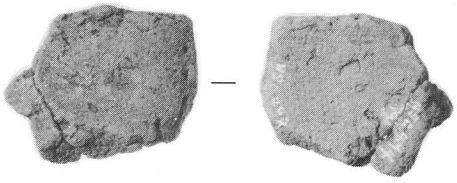
10



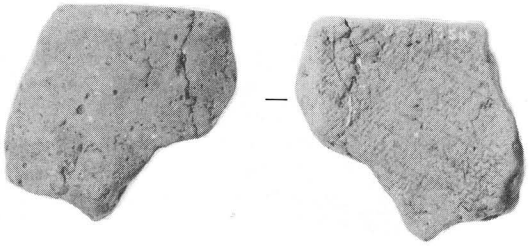
11



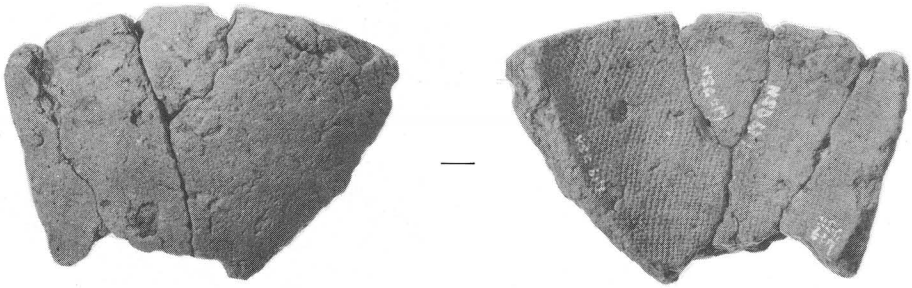
12



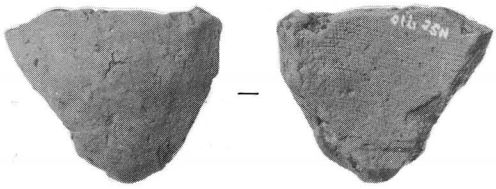
13



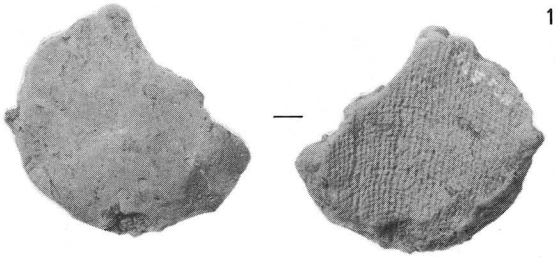
14



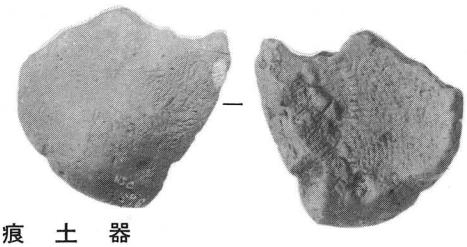
15



16

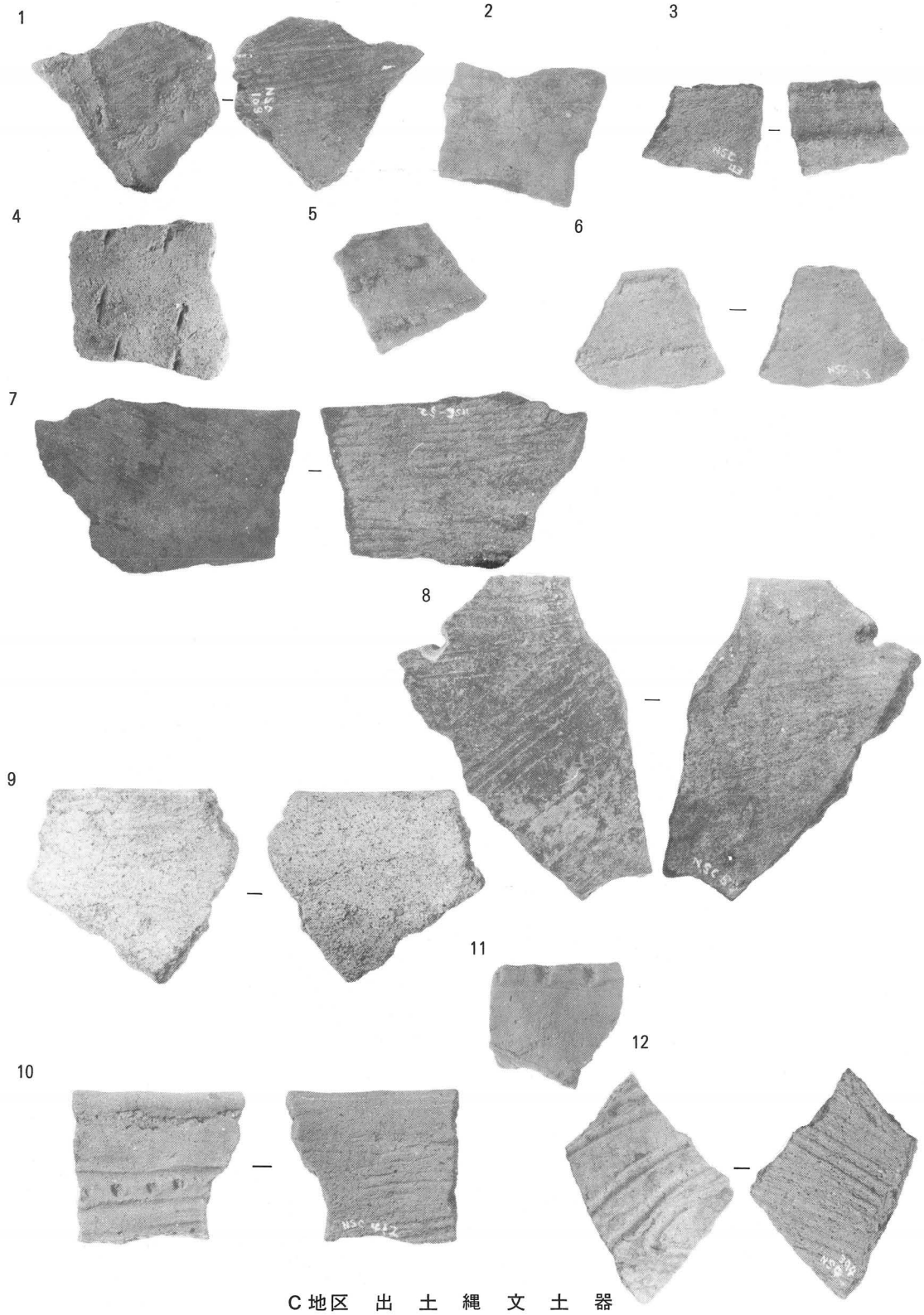


17

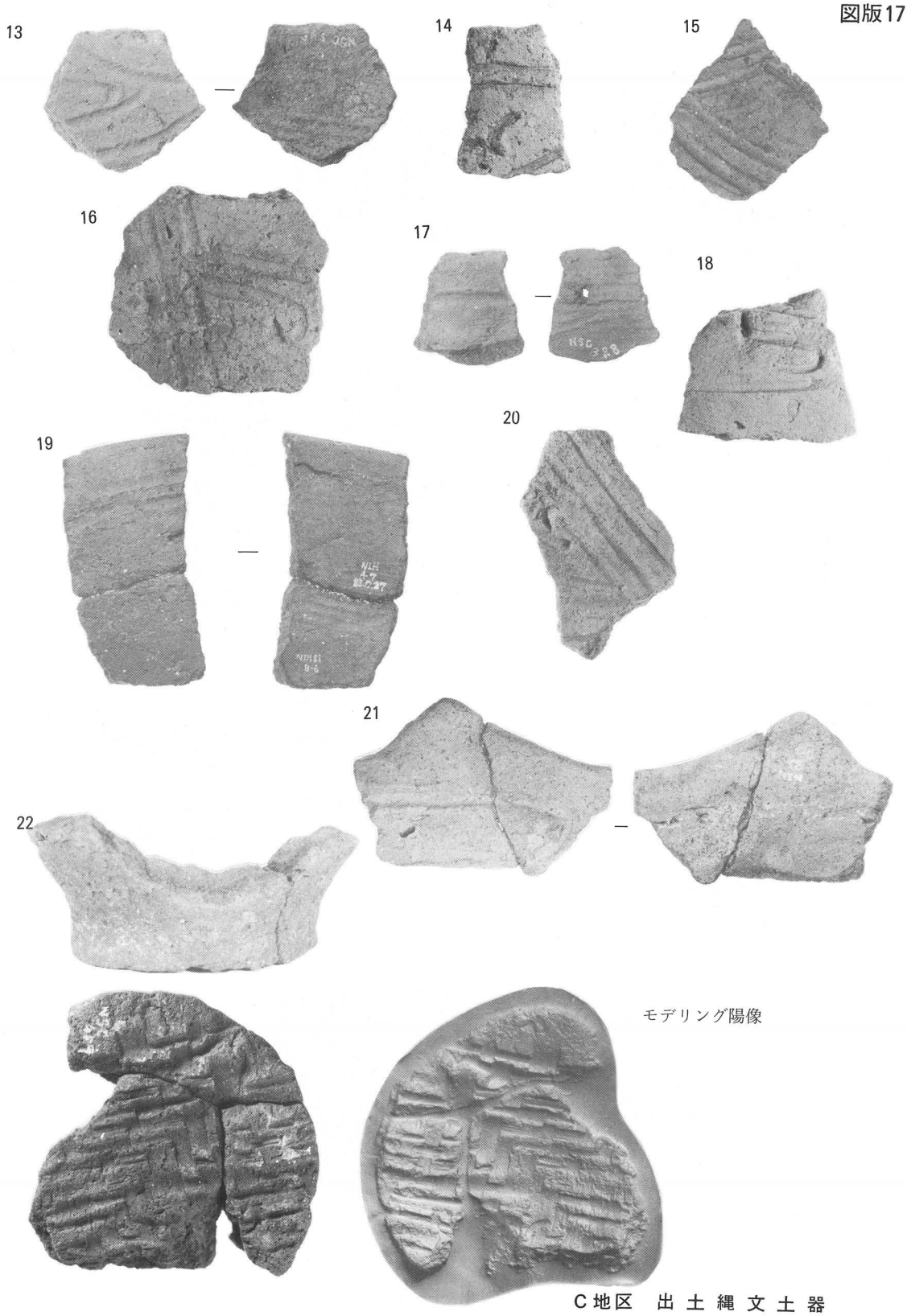


C地区　出　土　布　痕　土　器

図版16



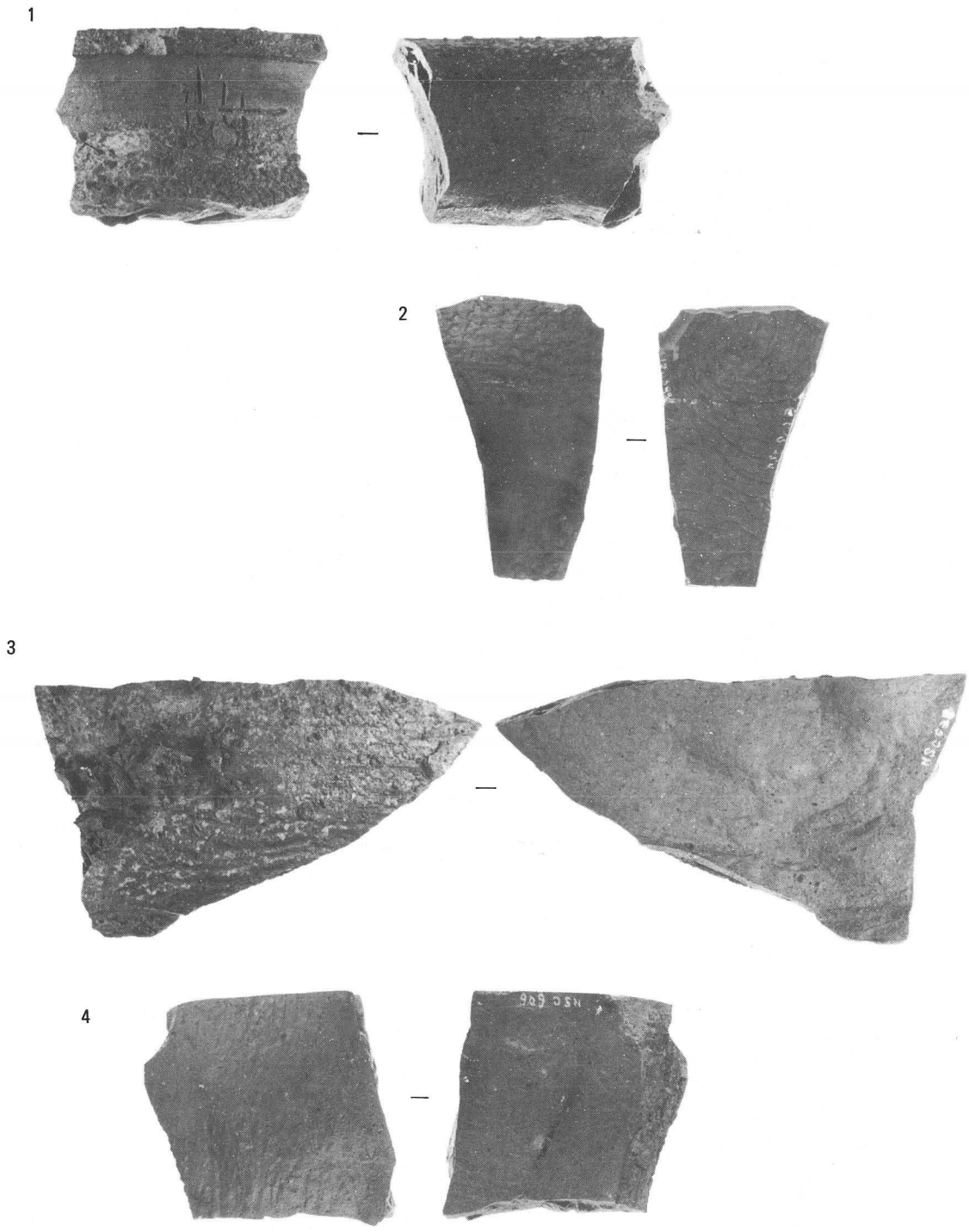
C地区　出　土　縄　文　土　器



モデリング陽像

C地区　出土縄文土器

図版18

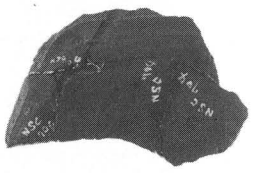


C地区 出土須恵器

5

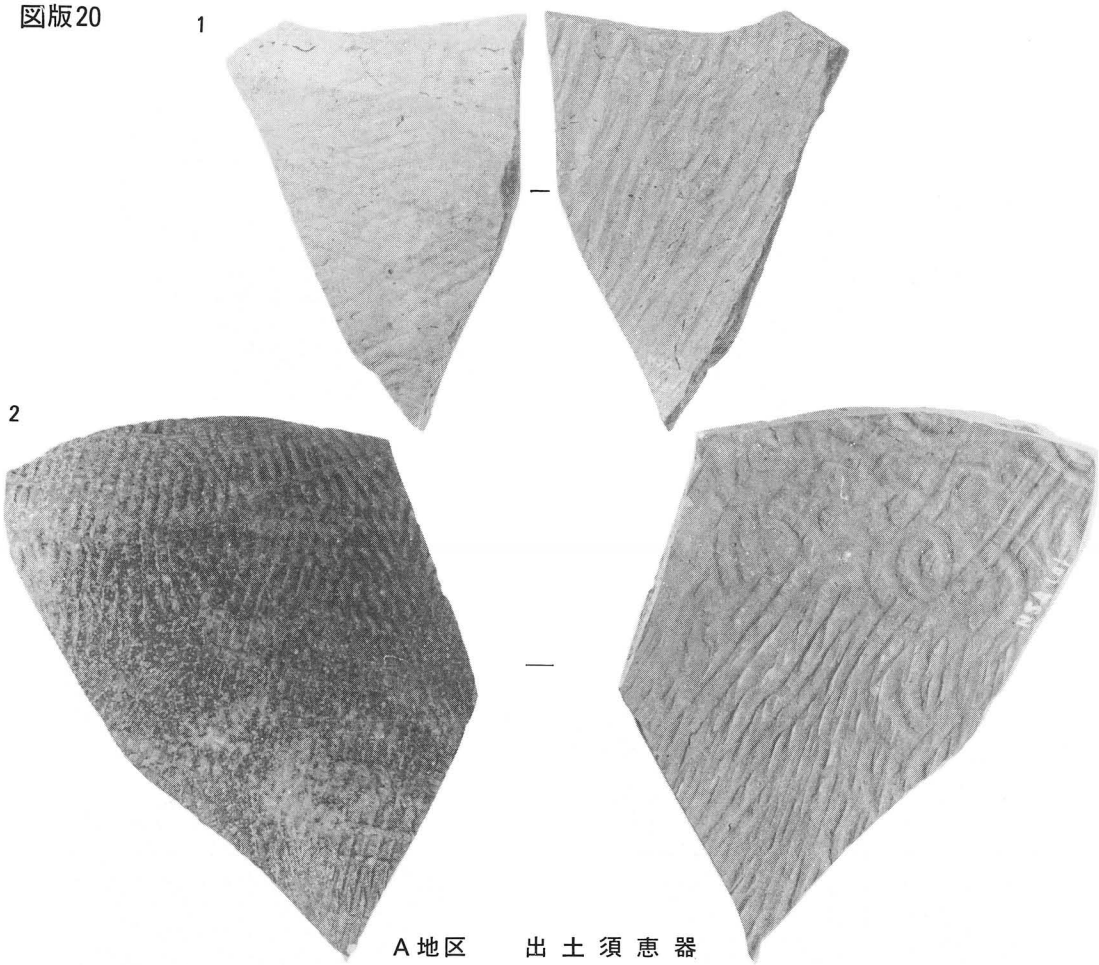
6

7

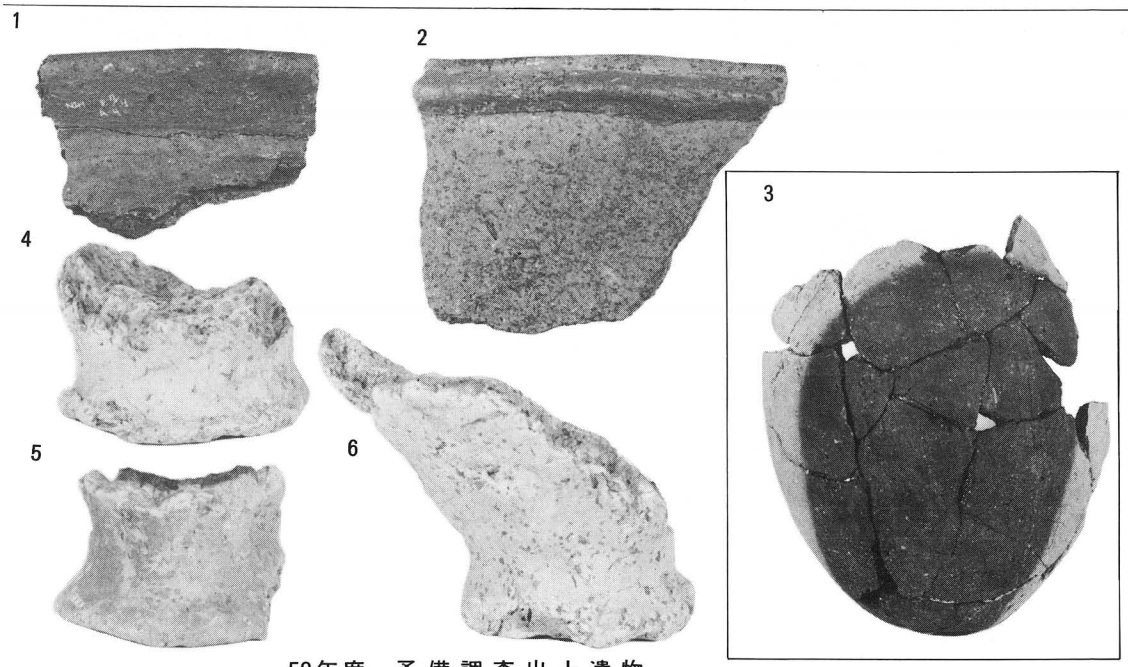


C地区　出　土　須　恵　器

図版20



A地区　出土須恵器



58年度　予備調査出土遺物

西ノ原地区遺跡
県営圃場整備事業南今泉地区
埋蔵文化財等調査報告書
昭和60年3月
発行 宮崎市教育委員会
印刷 株式会社 宮崎南印刷
宮崎市大字田吉350の1